

揺らぐ檀那

——丹波国穴太寺縁起小考——

中 前 正 志

一 はじめに——身代り説話と穴太寺観音

牧田諦亮『六朝古逸観世音応驗記の研究』（平楽寺書店、昭45）に収載された『繫観世音応驗記』の第十四話に、

蜀有一白衣、以梅檀函貯観世音金像、繫頸髮中。值姚萇寇蜀、此人身在陳臨戰、正与萇手自斫之。其唯聞頸中鏗然有声、都不覚痛。既得散走、逃入林中。賊去、解髮視函、函形如故。開出見像、身有破瘡痕。始悟向者之声是中像。

と見える。牧田著書が「姚萇（三三〇—三九三）が蜀に寇したというのは、おそらくは帝位に即いた太元十一年（三八六）以前のことであろう。晋書卷一一六姚萇載記に『初（姚）萇随楊安伐蜀』とあるものである」と注しつつ指摘する通り、『観音義疏』卷上にも載る話である（大正蔵卷三十四・九二六b）。観音像を函に入れて髪中に籠めていた人物が、戦場にて切られたが、全く痛みを感じることもなく無事で、見ると、函は元のままなのに、中の観音像に傷跡があった、という。観音像が身代りとなって、この人物を危難から救った、という靈驗譚であるに違いない。

また、教祖黒住宗忠に始まる黒住教の靈驗譚を収集した、明治三十三年十二月二十五日・国の教社発刊の『靈驗集』（国

立国会図書館所蔵本）第一編の第三十九話「神札を携帯して戦場の難を逃れ又戦功あり」の中には、

伊予国新居郡西條町字本町近藤芳太郎氏の甥に同郡金子村矢野益太と云へる人あり。此人去る明治廿七八年の日清戦役に後備兵にて召集され、……益太は戦地に於て毎日鉄砲を肩に荷ひしか、肩いたくなりしにより手拭を八ツに折りて服の下より肩にあて居りしに、或日の戦に肩より左の腹へ玉抜け通り一旦倒れたれども、別に異状なく息も出来る処より、起て大に働きたり。又或日右の足のトリコの節より玉打抜かれたれども、血も出せず尚進んで大に戦ひ、兩度迄玉に当りたれとも身体には更に疵なく、余りの不思議さに御守を出し見れば、恐れ多くも宗忠神社の御守に二ヶ所の穴ありける故、愈御神徳の尊きを知、皇恩を敬まひけり。……右玉の当りし服には二ヶ所、手拭は八ツ折なりしを以て八ヶ所、靴并に靴下にも打抜し玉の穴あり。……右の如き靈驗は枚挙に遑あらず。故に宗忠神社の御守は鉄砲除と申して、御一新前より武人の信仰甚多し。

という記事が見える。日清戦争時のこと、肩から左腹へと、右足と、都合二度、弾丸で撃ち抜かれ、確かに服や肩に当たっていた手拭、靴には穴が開いたのに、身体の方は血も出ず全く無事で、ただ、身に付けていた宗忠神社のお守りに二箇所穴が開いていた、という。お守りが身代りとなって撃ち抜かれ、弾丸からまさに守ってくれた、ということなのだろう。

無論、前者が刀剣であるのに対して後者が鉄砲といった、時代的な状況の差異など認められたりするけれども、右の二つの靈驗譚は基本的な骨格を同じくしている。共に、戦争状態のなか、身に帯びていた信仰対象物が身代りとなって傷を受けたおかげで、無事助かった、という話である。古代中国から近代日本まで、それらの中間や周辺、あるいは西洋世界においても、同類の話は、恐らくは枚挙に暇がないほどに数多く存することであろう。小稿が取り上げようとするのも、そうした多くある話のうちの一つ、右前者と同じく観音の身代り説話を中核とした穴太寺の縁起伝承である。

穴太寺は、口丹波とも称される地域、もとの丹波国桑田郡、現在の京都府亀岡市曾我部町穴太に所在する。著名な観音

寺院で、西国三十三所観音霊場の第二十一番札所。杉本苑子は、その著書『西国巡拝記』（大法輪閣、昭41）の中で、

古めかしい、角かどのよろず屋——。けっして都会ではなく、さりとて純然たる田舎でもない。いかにも京都近郊……。あかるく、平穏な丹波の夏空の下、しっくり、その空の色に解けこんでいる穴太寺のたたずまいに、観音信仰者の安あん心の姿を、ゆくりなく私は見た気がし、ふッと気持ちのなごむのおぼえた。

と記している。もつとも、近代には観音だけでなく、明治二十九年に本堂天井裏から見出され、その体を撫でると万病が平癒するという、珍しく彫像の仏涅槃像も、少なからぬ信仰者を集めているようだが。

八百年以上前の応保元年（一一六一）には、覚忠が西国巡礼を行っていて（『寺門高僧記』巻六）、この穴太寺の観音を拝した際に和歌を詠んでいる。『千載和歌集』（新日本古典文学大系）の二二二番歌の詞書に「三十三所観音拝みたてまつらんとて所く／＼にまいり侍ける時、美濃の谷汲にて油の出づるを見てよみ侍ける」とあり、続く二二二番歌に、

穴うの観音を見たてまつりて

見るまゝに涙ぞ落つる限りなき命に替る姿と思へば

穴太寺の観音は、早く十二世紀には、「命に替る」身代り観音として、相当に広く知られていたようである。

そして、その覚忠の頃から現代に至るまで、穴太寺観音の身代り説話を核とする同寺の縁起伝承が、多数の種々文献に著録されることになる。小稿では、身代り説話における主人公とも言うべき、穴太寺観音の造立を企てた檀那の動きに特に注意を払いつつ、それら文献のうち目にし得たもののみ概ね時代順に、あれこれ詮索しながら眺めてみようと思う。

二 猛悪の檀那——『扶桑略記』所載「穴穂寺縁起」と『法華験記』

早い段階のものとしてまず、『扶桑略記』（新訂増補国史大系）の応和二年条に、「穴穂寺縁起」に基づく記事が次のよう

に見える。

丹波国桑田郡宇治宿禰宮成。依^ニ婦女勸^ニ企^ニ造^ニ仏思^一。則同郡菩提寺号六穂寺。觀音像是也。遣^ニ使京洛^一。求^ニ仏工人^一。

沙弥感世^レ心^レ請往到。仏工感世毎日転^ニ誦法華經^一。其中諳^ニ誦普門品^一。日々必誦^ニ三十三卷^一。奉^ニ仕觀音^一。為^ニ多年業^一。

随^ニ宮成語^一。造^ニ金色觀音像^一。其功既畢。檀越施^レ物。宮成本性猛惡。竊進到^ニ大江山^一。隱立^ニ途側^一。射害^ニ仏工感世^一。

奪^ニ取所^レ与^ニ禄物^一。歸^ニ宅已畢^一。明日參^ニ寺拜^ニ新造觀音^一。其像胸前立^レ矢。昨日所^レ放之箭也。從^ニ疵赤血流出^一。慈眼

似^レ泣。金体如^レ惱。少低而立矣。宮成見^レ之。心懷^ニ憂苦^一。悲淚歎息。則知^ニ此像代^レ彼受^レ苦。為^レ知^ニ仏師存亡^一。

遣^ニ使令^レ見^一。於^ニ是感世無^レ痕居^レ宅。則語曰。我從^ニ丹波^一歸洛之日。雖^レ遇^ニ盜人^一不^レ被^ニ疵害^一。是則妙法威力。

觀音靈驗也。檀那生^ニ怖畏^一。自往^ニ仏工之所^一。更与^ニ禄物^一。見聞之輩發心供養。其像今存。已上六穂寺緣起

丹波国桑田郡に住む宇治宿禰宮成という人物が、婦女に勧められて觀音像を造立することになり、京の仏師である沙弥感世に要請する。その感世は、法華經を転読し、さらに、そのうちの普門品を三十三回暗誦するのを日課としていた、年来の觀音の信者であった。感世は要請を受けて丹波に下り、金色觀音像を彫像する。完成に及んで、檀那の宮成は一旦は、禄物を感世に施すが、この宮成は本性猛惡であつて、秘かに先回りし大江山で待ち伏せ、京に帰る途中の感世を射殺、施与した禄物を奪い取ってしまう。ところが、翌日になって新造の觀音像を拝すると、感世に放ったはずの矢が胸に立っていて、その傷から赤い血が流れ出し、眼は泣いているようで、苦しそうに少しうなだれて立っていた。宮成は、この像が感世に代わつて苦を受けたのだと悟り、使いを遣つて感世の安否を確かめさせる。感世は、歸京途中に盜人に遇つたものの被害を受けることはなかったと語り、無事自宅にいた。そこで宮成は、自ら感世の所に行つて、改めて禄物を与えた。

以上のような内容である。

普通であれば宮成の矢を受けて死んでいるはずの感世を、觀音像が代わりに矢を受けることで救つた、という話。戦争

という状況下ではない点や、身に帯びているのではなく離れた場所に存する信仰対象物（この場合の観音像は、感世の彫像したものであっても、感世が特に信仰を寄せていたものという訳ではないかもしれないが）によって救われる点など、種々異なる面もあるけれども、それでも確かに、冒頭に掲げたのと同類の身代り説話であるに違いない。

* 懐中の穴太寺観音

主に大阪で活躍した歌舞伎作者・勝彦蔵の脚本『西国三十三所観音霊験記』（大阪府立中之島図書館所蔵本）の第五幕中に、こんな話が見られる。「丹波の国桑田郡篠村といふ所で生れた者」が、「穴穂寺の観音さまが大の信心で」、「ふだんお姿を肌につけていた。ある時、「二人りの侍にずた／＼に切り殺され、息の絶へる、それ迄の四苦八苦の苦しみ」を味わったが、「いつしか夢の覚めたやうにふと眼を開いて見ると、身内に一つの疵もなく」、「懐中の観音さまの御影」が「誠に刀で切ったやうに」「ずた／＼に切れ」ていた。こちらの方は、小論冒頭に掲げたのと正に同じく、身に帯びていた信仰対象物が代わりに傷を受ける形の身代り説話になっている。先の『扶桑略記』以下、後出諸書に見えて広く知られた穴太寺観音の身代り説話を背景として、同類ながらそれとは異なる如上の形のものを、勝彦蔵が創作したのである。あるいは、そうした形の説話が実際に行われていて、それに取材したということも考えられようか。なお、穴太寺では現在、「身代り御守」を販売している。右の「懐中の観音さまの御影」とは少々形態が異なるが、それや先の宗忠神社のお守りと同様のご利益が期待されているようである。

造立されて間もない観音像が身代りに立ったというのは、同像の霊験がいかに迅速強大であるかを印象付けるところがあるろうが、それは、「奉仕観音」為多年業（実線部）という、造立以前の感世の、観音に対する長年の帰依の結果でもあるに違いない。感世はより具体的には、毎日法華経を転読し、そして特に、その観世音菩薩普門品を日々三十三回暗

誦していた。普門品の中には、有名な経文「若復、有人臨當被害、称観世音菩薩名者、彼所執刀杖尋段段壞、而得解脱」や「若三千大千国土、満中怨賊、……応当一心称観世音菩薩名号。……若称名者、於此怨賊当得解脱」(岩波文庫)が含まれている。冒頭に挙げた『繫観世音応驗記』の一話も、「右八條、普門品臨當被害」と記される「八條」中の一條であつて、まさに上記経文のうち前者の例証話として掲げられているのだが、普門品を暗誦し観音に帰依していた感世が弓矢の害を免れたという右の話も、上記のような普門品の経文に対応するものとなつていよう。同話は、観音の靈驗譚であると共に、普門品を中心とした法華經の靈驗譚ともなつていのである。同話末尾部に「是則妙法威力。観音靈驗也」(波線部)と記される通り。

無論、感世の身代りに立つた観音像が、同話冒頭部に明記される通り、菩提寺すなわち穴太寺(穴穂寺)の観音となるのであつて、同話は、ただ単に観音の靈驗譚というのではなく、特に穴太寺観音の靈驗譚である。ところで、先述通り口丹波とも称される地域に所在する、その穴太寺は、『一遍聖絵』卷八冒頭の記事などから「当時の山陰道筋に當つていたことがうかがわれる」(『亀岡市史』中巻、31頁)とされる。平安時代になつて、京から丹波・丹後へと向かう山陰道は、ルート変更したと推定されてお¹り、それによつて、穴太寺は山陰道により近くなり、同道から一km余りの地点に位置することになったようである。また、宮成が感世を待ち伏せして襲つた「大江山」は、老ノ坂とも称され、穴太寺から山陰道を京へ向かつて七、八kmほど進んだ地点にあつて、京と丹波地方とを結ぶ交通の要衝であり、盗賊などのしばしば出没する地点でもあつた。² いずれも指摘されているものだが、例えば、正暦二年(九九二)正月十四日「織部織手長葛井某問状」(九條家本延喜式卷一裏文書、『平安遺文』三四五)に「於大枝山中強盜廿人口出来、射乙身、奪取隨身雜物已了」と見えるし、芥川龍之介『藪の中』が取材した『今昔物語集』卷二十四23「具妻行丹波国男於大江山被縛語第二十三」も、京から丹波に向かつていた夫婦が、大江山で襲われる話である。他ならぬそんな大江山で襲われた感世が、穴太寺の観音の靈

験によって救われた、という穴太寺縁起伝承は、如上の当時の環境下、大江山の盗賊除けという特定の靈験・利益を同観音が有することの証として、大江山へと至る山陰道の道筋に所在した穴太寺において、京と丹波地方との間を往還する人々に向け盛んに吹聴される、というようなこともあったかもしれない。

なお、『扶桑略記』の右引記事は、末尾に「已上穴穂寺縁起」と注するから、「穴穂寺縁起」なる一書から引用されたものであることを窺わせている。しかし、同書は現伝せず全体像は不明であるし、『扶桑略記』がどの程度の引用をしているのかもわからない。宮成は、感世を襲った明くる日に「参_レ寺_ニ新造観音_ニ」（右引破線部）しており、既存の「寺」に「新造観音」を安置したようであるが、この寺すなわち穴太寺自体については、その開創など何も記していない。右引記事だけでは、確かに穴太寺観音の造立縁起にはなっていない、穴太寺そのものの縁起とは言い難いであろう。まとまった一書の「穴穂寺縁起」があつたならば、それは、右引記事の載せる観音の靈験縁起譚を中核としつつも、より大きな視点のもと穴太寺全体に関わる縁起記事を配したものであつた可能性が考えられるところだろう。しかし、そうした穴太寺全体の縁起と言ふべき内容を十分に備えた記述は、後述する宝徳二年（一四五〇）重修の『丹波国穴太寺観音縁起事』まで見当らない。

先に触れた通り、穴太寺縁起伝承は、法華経の靈験譚としての側面を持っているのであつて、『法華験記』巻下85（日本思想大系）にも、次の通り掲載されている。なお、日本思想大系に翻刻された享保二年版本に基づきつつ、他本と大きく異なる彰考館本の本文も、やはり日本思想大系収載翻刻により合わせて示した。（ ）は、その中に記した彰考館本の本文がその位置に入っていることを示し、「」は、その上の太字部分が、彰考館本では、その中に記した本文になっていることを示す。「ナシ」は、その上の太字部分が彰考館本にはないことを示す。法華経を読誦していた仏師感世を中心に据えた形になっており、宇治宮成の方は、彰考館本以外では、「檀越」とあるだけでその名が明されることもない。また、「寺」

は出てくるが、穴太寺（菩提寺）という寺名が記されることもない。

沙弥感世。以造仏像為其所作。而誦法華經。毎日必讀一品一卷。其中暗誦普門一品。日々必誦三十三卷。又（毎月）十八日持齋。奉仕觀世音「ナシ」菩薩（以為業）。得造仏請。往「住」丹波国桑田郡。奉造金色觀世音菩薩（像了）。

其仏檀越（宇治宮成）雖作仏像。專非善人。不善武者也「ナシ」。（只被勸婦。如此造立此菩薩也。造仏功畢。）施与仏

師種々祿物。令京「ナシ」上時。檀越（竊）作是念。我殺此仏師。取返「反」所与物。則於大江山「即前立至于大山」

（於途側相待。而）殺「射」害仏師。奪取祿物而還本「歸住」所。檀越為見所造觀音。往「参」寺開戸奉見新仏。金

色觀音御肩被切割「胸矢立」。從其痕中「疵」赤血流下。滿地凝結「出」。（從御眦紅淚下。）檀越見了「之」。心生怖

畏。悲泣歎息「抱憂惱。悲泣生怖畏思」。我已打切「射」仏師肩「胸」。既「ナシ」殺害畢「ナシ」。今「是」此觀音同

御肩被切「奉射也」。是「ナシ」希有（奇異）事（也）。尤可為怪「ナシ」。即遣使者「ナシ」。尋「為聞」仏師存不

「亡」。使者上京見仏師者「遣於彼住所。使者還云」。平安在家。無一分痕「仏師故無一分之痕。平安居本宅」。使者還

来此由告主「ナシ」。檀越（聞之）弥生怖畏懺悔。即知觀音代於仏師。被切「射」損我身。助仏師命（給也）。即往仏

師家。反与祿物。種種「ナシ」問訊（之处）。仏師云。我（山中）雖遇盜人。身不蒙一分疵。安穩還家。豈「是」非觀

音（靈驗）妙法威力哉「ナシ」。仏師檀越。見聞之輩。皆「ナシ」發道「菩提」心。奉仕觀音。誦（誦）法華經。（為

末代所注置也。後見之輩。信觀音靈驗。所可蒙現当之利益也。更不可成疑。）応「深」和二年有此事矣。

種々検討・指摘されている通り、彰考館本の方が先引『扶桑略記』に近い。それに対して他本には、『扶桑略記』・彰考館本と大きく異なる点がいくつか見られ、そのうち、宮成が感世の胸を射たのに対応して觀音の胸に矢が立っていたというのではなくて、感世の肩を切り、觀音の肩が切り割られていた、となっている（破線部）のが、最も目に付く点である。いずれが本来の形なのかという問題は、当初の觀音像に刻されているであろう傷跡の位置・状態を確認することによって

容易に解決できそうにも思われるが、実際はなかなか難しいようである。後出「*観音の傷」参照。

彰考館本も含めた『法華験記』が、『扶桑略記』と異なっていて注目されるのは、右の波線部。『扶桑略記』の対応記事「見聞之輩発心供養」と比する時、発心した者の中に仏師感世と檀那宮成が明確に含み込められていることがわかる。もともと、『扶桑略記』が少々省略した記述の仕方をしたに過ぎず、檀那の場合で言えば、上引部直前「檀那生_三怖畏_一。自往_三仏工之所_一。更与_三祿物_一」という行動の中にすでに、檀那の発心も暗示されていると言えるかもしれない。したがって、両者の差異を殊更問題にすること自体問題があるとも思われるのであって、ここでは、少なくとも『法華験記』においては明確に、檀那宮成も発心するという内容になっていること、その点に注意しておきたい。

『扶桑略記』と『法華験記』の右記事は、檀那の宮成を「本性猛悪」（『扶桑略記』二重傍線部）「専非善人。不善武者也」（『法華験記』二重傍線部）と性格規定している。その荒く悪辣な性格は、祿物を奪い返そうとすぐさま凶行に及んだ宮成の行動と対応しよう。そんな宮成が発心したという側面に注目するならば、右の話は、悪人発心譚でもあるということになる。そして、その発心を齎したのは、宮成の放った矢を代わりに身に受けるという観音の行動であって、すなわち、発心は、観音が身代りの靈験によって導いた結果に他ならないだろう。そのことは、早く例えば梅原忠治郎「丹波の穴太寺」（『西国三十三所巡拝通誌』上巻、梅原書店、昭12）が「此物語は観音の慈悲心の効力は、よく盗心の人をも寛容して、普ねく仏心の加護に浴せしむることを教化したもの」などと指摘するところであり、さらには、近代の解釈を待つまでもなく、後出宝徳二年（一四五〇）重修『丹波国穴太寺観音縁起事』が、「極悪」の宮成が「前非を悔て、つゐに仏道に進修」することになったのを、観音の「教化」として捉える理解を表明していたりもする（編末資料A81～85行）。観音の靈験は、仏師感世の命を守っただけでなく、同時に、檀那宮成を発心へと導いたのである。

ところで、『扶桑略記』と『法華験記』は共に、応和二年（九六二）のこととして右の穴太寺縁起伝承を記しており、同

伝承は同年以降十一世紀中葉までには成っていたものと見られるが、それがいかにして成立したのか、その事情は明らかでない。ただ、類似する内容の伝承に種々取り巻かれたなかで成立したらしいことは、確認できる。

信仰対象物が代わりに傷を受けたために助かったという身代り説話が多く存することは、前節に見た通りである。さらに、そこでは信仰対象物を身に帯びている事例を挙げたが、穴太寺縁起伝承のように信仰対象物が離れた地点にある場合の事例も、同伝承成立以前あるいは前後に種々見られる。『集神州三宝感通録』巻中31は、先引観音経経文通り、三度切られたものの刀の方が折れて身は無事だった孫敬徳が、後に別に安置していた観音の金像を見ると三つの刀傷があった（末尾に「見齊志及旌異等記」、大正蔵、魯迅『古小説鈎沈』にも採録）、『高僧伝』巻十三興福第八7や『法華伝記』巻五24は、処刑場に向かうための車が壊れるなどして処刑を免れた僧洪が帰宅して、鑄型を開き造立途中の金像を見ると、胸の部分が焼け焦げていた（『法華経利益物語』にも採録、巻七9「金銅の仏像身がはりにたち給ひて牢舎をのがれ命たすかりし事」、古典文庫）、『冥報記』巻中や同書に拠る『今昔物語集』巻六14は、雷に撃たれて倒れてきた柱が張亮の額を直撃したが全く痛みなく、供養していた等身の仏像を見ると額に大きな傷痕があった、という話を各々載せる。いずれも中国の話だが、『法華験記』巻下114や『今昔物語集』巻十六26は播磨国赤穂郡の盗人の話で、実際に矢を受けた観音が出てくるわけではないものの、身代りに矢を受けようという観音の夢告を得て、矢が身に立つことなく助かった、というもの。矢を受けるという点では、地蔵の話が有名で、『今昔物語集』巻十七3は、氏寺に参詣し地蔵を見ると、戦場で受けた一本の矢が背に立っていたと伝える。木像が血を流すことについては、丁蘭木母の話がよく知られ、最近の阿部泰郎「生身と流血——中世縁起・説話における仏の身体——」⁴（『仏教美術における身体観と身体表現』仏教美術研究上野記念財団助成研究会報告書第二十九冊、平14）に種々類例が挙げられつつ、その意味するところなどが論じられている。あるいは、身代りになった仏像が苦痛の涙を流す話としては、彫像でなく絵像ではあるが、三井寺の泣不動説話が殊に著名である⁵。

また、先に見た穴太寺の縁起伝承は、観音の靈驗に導かれての悪人発心の話ともなっていたが、それに類する伝承も知られる。例えば『法華伝記』（大正蔵）卷六諷誦勝利第八之四21は、常に観音品を読誦していた沙門法道の話で、盜賊が弓矢で射殺そうとするが、矢が弓に固く付いて放つことができず、「賊遂帰命。投弓於地。又不能得如是神人等。捨而逃走」ということになった、と伝える。このままでは、観音の靈驗に接して賊が改心し発心した話とまでは言えないだろうが、そういう話へと展開する可能性を秘めているよう。実際、後述するように後世の『法華經直談鈔』観世音普門品にも穴太寺の縁起伝承が掲載されているが、その直前に連続してこの法道の話が置かれていて、それでは、盜人が子細を尋ねたのに対して法道が「我ハ唱ル物トテハ、観音名号也。讀ム物トテハ、観音經也」と言った時、「此盜人難有思即發心^{カニテ}、法道前モト、リ切り出家^ニ成リ、観音信仰^{スル}也」という状況になったと記され（金台院本）、寛永版本では、そもそも「盜人發道心事」と題されてもいる。この場合は、自ら弓矢などで襲った人物が、観音の靈驗により救われたのを目の当たりにして、発心し観音の信仰者となる、という点で、穴太寺の縁起伝承の場合と共通することになる。

あるいは、例えば梅原忠治郎「西国三十三所靈場伝説の考察」（前掲梅原著書）が、「開基又は再興せる人々の中には、多く其地の土豪にして、常に狩獵を以て生業とした。粉河寺の大伴孔子古にしても、葛井寺の藤井安基にしても、革堂の行円上人にしても、穴太寺の宇治宮成にしてもが然りで、一朝その殺生の戒を悟って、仏心に帰依し、観音の大信仰者となつて、寺院建立の挙に志したのである」と述べる。宮成が「常に狩獵を以て生業とした」とは、先引『扶桑略記』『法華驗記』には明示されていないが、ただ、「本性猛惡」（『扶桑略記』二重傍線部）「專非善人。不善武者也」〔ナシ〕（『法華驗記』二重傍線部）といった性格や、すかさず弓矢を持ち出して感世を襲ったという行動からは、殺生を忌避することなどない、さらにはそれを日常事とするような人物像が、確かに窺われよう。後述する近世前期の縁起絵巻の冒頭部の絵は、宮成を「邸宅で雉を受け取る姿に描く」し、「背景の屏風に立てかける弓矢が殺生を暗示する」（『新修亀岡市史』資料編第

四卷287頁）ものとなっている。伝承内容は種々違うものの、この宮成と同類の人物を主人公とする縁起伝承が、西国三十所札所寺院に限っても少なからず見られるのである。先掲阿部論文では、穴太寺の縁起を成相寺の縁起とともに、「狩獵を不可避に伴う殺生と肉食―死穢と血穢に塗れ、それどころか忌避せず、むしろその裡から△聖なるもの▽がもたらされる」という信仰のありかたを示している」ものと捉えて、興味深い論が展開されている。

穴太寺縁起伝承の右の如き各要素・側面を複数併せ持った事例も、知られる。『法華驗記』巻下115や『今昔物語集』巻十六3に載る周防国の判官代の話である。感世と同じように観音の熱心な信者で、特に同国の三井寺『観音利益集』では「新寺」、「二井寺」の誤りかともされる）の観音に長年参仕し供養していた判官代が、帰宅途中に怨敵に待ち伏せされ殺されるが、不思議と全く傷なく帰宅した。怨敵から判官代の家に様子を見に来たりするが、確かに判官代は全く無事であった。そして、夢告を受けて判官代が三井寺に参詣すると、観音が傷だらけになっており、そのことを聞いて、怨敵は、悪心を止めて道心を発した。判官代と怨敵、檀那感世と仏師宮成、という登場人物同士の関係のあり方や、観音の造立という要素の有無などにおいて、両者異なっているけれども、一方で、離れた場所に安置された観音の身代り説話であり、かつ、悪人発心譚ともなっているという、基本的な部分が共通するほか、待ち伏せという襲い方や襲った相手の家に様子を窺いに行く点など、細部の要素にまで共通性が及んでもいる。また、『今昔物語集』巻二十九25の話にも注意される。丹波守であった平貞盛に悪性の瘡が出来た際のこと、京から迎えた医師に、「吉馬」などを与えて帰すに当り、児の肝を薬としたことが世間に知れるのを恐れて、「山ニ罷会テ、強盜ヲ造テ」医師を「射殺」そうとした、という話。穴太寺の縁起伝承とは基本的な趣は大きく異なるが、物を与えて帰す、その道中で襲うという筋書が共通するし、しかも、襲う場所が丹波から京に向かう道中の「山」すなわち大江山と考えられる点も、一致している。

これら諸話との実際の関係を明らかにすることは難しいけれども、穴太寺の縁起伝承が、様々な類話などに取り巻かれ、

それから種々の示唆を受けながら誕生してきたであろうことは、かなり容易に想像がつく。

三 悪人離れする檀那——『今昔物語集』以降宝徳二年重修『丹波国穴太寺観音縁起事』以前

『今昔物語集』（日本古典文学大系）巻十六5には、穴太寺の縁起伝承が次の通り記述されている。

今昔、丹波ノ国、桑田郡ニ住ケル郡司、年来、宿願有リ依テ、観音ノ像ヲ造奉トラム思テ、京ニ上テ、一人ノ仏師ヲ語ヒテ、其新物ヲ与ヘテ、懃ニ語フ。仏師、可造キ由ヲ受テ、新物ヲ受ケ取ノ。郡司、喜ビテ国ニ返ヌ。此ノ仏師ノ心慈悲有テ、仏ヲ造テ世ヲ渡ルト云モヘド、幼ノ時ヨリ観音品ヲ持テ、必ズ毎日ニ卅三巻ヲ誦リケ。亦、毎月ノ十八日ニハ持齊ニ懃ニ観音ニ仕リケ。而ルニ、此ノ仏師、郡司ノ語ヒテ請後、三月許ヲ経間ニ、郡司不思係サル程ニ、此ノ観音極美麗ニ造奉テ、仏師具ニ郡司ガ家ニ将奉タリ。如此クノ物ハ、仏ノ新物ヲ請取ト云モヘド、約ヲ違ヘテ久ク程経ル事、常ノ事也。而ルニ、不思係ス、此疾ヲ造奉ニ合セテ、仏ヲ思ヒノ如ク美麗ニ造テ将奉レバ、郡司無限喜テ、「此ノ仏師何ナル禄与トム」思フニ、身不合テニ可キ物無、只、具タル物馬一也。黒馬ノ年五六歳許ナル、長ケ八〇許也、口和テ足固、道吉行テ走疾、物驚キ不為テズ瘦難。諸ノ人、此ノ馬ヲ見テ欲タル云モヘド、郡司、此無限財思テ、年来持タル、此ノ仏師喜サニ、「然ハ此ヲ与トム」思テ、自引出テ与。仏師、極喜テ、鞍ヲ置テ乗テ、本、乗タリノル馬ヲバ引カセ、郡司ガ家ヲ出テ、京ニ上ヌ。此馬ヲバ居傍ニ立テ、飼ニル、其厩草食ヒ散ラタル見ルニ、此ノ郡司恋ニ悲ク思ヒテ、忽ニ渡ノ事悔キ事無限。片時思ヒ可延クモ非ズ、焦リ糙ム様ニ思モヘド、更ニ思ヒ不止ズ、遂ニ親ノ^テ云ク、^ニ徳ノ為ニ、此ノ馬ヲ充ツレ、更ニ為^ニ借^ニ我ヲ思ハ、此ノ馬ヲ取返来^テヤナム。盗人ノ様造テ、仏師ヲ射殺テ、必ズ取来^レト。郎等「安キ事也」ト云テ、弓箭ヲ帶テ、馬ニ乗テ走ラセ行キヌ。仏師ハ直道ヨリ、郎等近キ道ヨリ前立テ、篠村ト云フ所ニ行テ、栗林ノ中ニ待立テリ。暫許有テ、仏師、此ノ馬ニ乗テ^ニ来ル。郎等、「心疎態ムトモセ^ニ為トカナ」思モヘド、憑ミヲ係リケタ主ノ云フ事背難バケレ、弓ニ疾鴈箭番テ、向ヒ様ニ走ラセ、仏師ニ押ノ向ケテ、弓ヲ強引テ、四五丈許ノ程ニ射ムニ、何カハニ放サム、臍ノ上方ヲ背ニ箭尻ヲ射出。仏師、仰ケ様ニ箭ニ付^ニ落ヌ。馬ハ放レテ走ルヲ、追ヒ廻テ捕ヘテ、返テ主ノ家ニ将

揺らぐ檀那

行ヌ。郡司、此ヲ見テ喜ブ事無限、本ノ如ク傍ニ立テ、撫飼フ。其後、日来ヲ経ルニ、仏師ノ許ヨリ尋事モ無ハケレ、恠ノ思テ、此ノ郎等ヲ京ヘ上ゲテ、仏師ノ家ヘ遣ル。『何事御スル、久ク案内ヲ不申ネバ不審クナム』云ヘト。教ヘ遣バテ、郎等、京ニ上テ、然ル氣無クテ、仏師ノ家ニ這入バテ、其ノ家ハ引入レテ造ニタル、前ニ梅木ノ有ルニ、此ノ馬ヲ繫テ、人二人ヲ以テ撫サセ、草飼テハセ、仏師延ニ見居タリ。馬、有モ^メヨリ^メ肥ニケ。郎等、此ヲ見テ、奇異ク思フ事無限。射殺^ノテ仏師モ有リ、取返^ノテ馬モ有レハ、若、僻目^{カト}思^テ守^リ立^ニテ、仏師鮮ニ有リ、馬モ不違^{ネバ}、肝迷^ヒ心騒^ギテ、怖^トロ^ン思^フ云^ヘト、郡司ノ言ヲ語ル。仏師ノ云ク、「何事モ不侍ズ。此ノ馬ヲ万人ノ欲^テガリ、買^ハム申^セト、馬ノ極タル一物バナレ、不売^ノ持^テ侍^ル也」ト。郎等、尚、奇異ト思テ、此ノ事ヲ疾ク主ニ聞^トセム為ニ、走ルガ如クニ返^リ下^ヌ。主ノ許ニ忝^ギ行^テ、此ノ事ヲ語ル。郡司モ、此ヲ聞テ、奇異ト思テ、既ニ行^テ見^ルニ、忽ニ其ノ馬不見^エズ。郡司恐^テ怖^レテ、観音ノ御前ニ参テ、此事懺悔^セム思^テ、観音ヲ見奉^レハ、観音ノ御胸ニ箭ヲ射立奉^テ、血流^リタ。即チ、彼郎等ヲ呼^テ、此ヲ見^セテ、共ニ五体ヲ地ニ投^テ、音^ヲ挙^テ泣^キ悲^ム事無限。其後、二人乍ラ忽ニ髻^ヲ切^リ出家^ノ、山寺ニ行^テ、仏道ヲ修行^シケ。其観音ノ御箭ノ跡、于今開^テ不塞。人皆参^テ此ヲ礼^ミ奉^ル。仏師ノ慈悲有^ルヲ以^テ、観音代^ニ箭ヲ負^ヒ給^フ事、本ノ誓ニ不違^{ネバ}、貴悲事也。心有^{ラム}人ハ必ズ参^テ礼^ミ可^キ奉^キ観音ニ在^ムトナ^リ語^リ伝^ハトヤ。穴太寺（菩提寺）という寺名も、同寺を意味する語（「寺」など）も全く出てこないが、基本的に前節に見たのと同じ穴太寺縁起伝承であるに違いない。そして、日本古典文学大系が前節に見たうち『法華験記』を本話の出典と認めていたのに対して、日本古典文学全集は、「従来出典に擬せられた『法華験記』下の八五は、同話ではあるが本文・内容に大差があり、参考に供された可能性はあるが他に主たる典拠があつたと想定される」と訂正した。例えば冒頭付近実線部における感世のあり方は、先引『法華験記』の「而誦法華經。毎日必誦一品一卷。其中暗誦普門一品。日々必誦三十三卷。又（毎月）十八日持齋。奉仕観世音〔ナシ〕菩薩（以為業）」と、一部は表現面に至るまで大変近いけれども、確かに、一方で「本文・内容に大差」が目立つ。最も目に付くのは、『法華験記』にない馬の要素が見られることで、檀那の郡司は愛馬を仏師に与え、ところが、惜しくなつて帰京途中の仏師を襲つてその馬を奪い返すが、後日、馬が仏師のもとに返つていて

郡司の厩からいなくなっていた、とする。『扶桑略記』の方にも全く見えない要素である。その他、仏師が丹波でなく京で観音像製作に当ることや、その観音が早くに完成すること、檀那本人でなく郎等が仏師を襲うこと、観音に矢が立っているのを発見してからでなく、その前に仏師の様子を窺わせていることなども、『法華驗記』さらに『扶桑略記』とは異なる筋書・展開である。

さらに、右の『今昔物語集』において特に注目されるのは、特に破線部あたりの郡司のあり方、描かれ方である。檀那の郡司は、仏師が思いがけず早く美しく観音像を造ってくれたことを大変喜び、貧しい中で何を禄に与えようかと考え、嬉しさのあまり、これまで欲しがる人がいても手放さず大変大切にしていた愛馬を仏師に与える。ところが、仏師が京へと出立して実際に馬がいなくなり、厩で草を食い散らかしているのを見ると、思い切ったはずの愛馬のことが恋しくいしく思えて、仏師に与えたことが急に悔やまれてくるのである。そうなるともう抑えようとしても抑えきれず、ついには仏師を射殺して馬を取り返してくれるよう郎等に依頼するに至っている。その間、郡司の心理は大きく揺らいでおり、『今昔物語集』は、その「人間心理をえぐる」（新編日本古典文学全集）。

ところで、先の『扶桑略記』『法華驗記』の「宇治宮成」・「檀越」と違って『今昔物語集』では「郡司」とするけれども、両者は伝承上、穴太寺観音造立の檀那として同じ役割を担っている同一人物であるに違いない。ところが、前者が、「本性猛悪」（先引『扶桑略記』二重傍線部）「専非善人。不善武者也」ナシ」（先引『法華驗記』二重傍線部）と、根っからの本来的な悪人と規定されているのに対して、後者の場合は、そうした規定は見当たらず、少なくとも悪人であるという性格付けが既定のものとしてなされているわけではない。また、「檀越施」物。宮成本性猛悪。竊進到大江山。隠立ニ途側。射害ニ仏工感世」（『扶桑略記』）「施与仏師種々禄物。令京「ナシ」上時。檀越（竊）作是念。我殺此仏師。取返「反」所与物。則於大江山「即前立至于大山」（於途側相待。而）殺「射」害仏師」（『法華驗記』）といったあたりの記事

からは、規定された性格に対応して檀越宮成が、躊躇なく直線的に凶行に至っているように感じられる。それに対して一方、『今昔物語集』の郡司の場合は、最終的には同じ凶行に及び、そのため『法華驗記』の檀越と同様で最後には懺悔し発心出家することになるのだが、右の通り、散々に心情を揺るがせ葛藤を経て、ついにどうにも堪らなくなって凶行に及ぶことになるのであって、そういう状況からは、少なくとも『扶桑略記』『法華驗記』の宮成・檀越ほどの悪性は感じられないだろう。むしろ、ごく普通の善良な人間が一時的な悪心を起こしたものと解せよう。⁶⁾『今昔物語集』は、もともとの悪人などではない、そんな普通の人間に潜む危うい心理をこそえぐり出しているのだと言うこともできるだろうか。あるいは、『扶桑略記』や彰考館本『法華驗記』では「依_ニ婦女勸_ニ企_ニ造仏思_ニ」「只被勸婦。如此造立此菩薩也」と、専ら婦女の勧めを受けて造仏を企てているのに対して、『今昔物語集』の郡司は、「年来、宿願有_{ルニ}依_テ、観音ノ像ヲ造奉_トム思_テ」と、宿願あって自主的に造仏を図っているものであって、そういう点でも、その郡司の方がより善人的な印象を与えていよう。

揺らいでいるのは、愛馬をめぐつての郡司の心理だけではなかったのである。右のように、穴太寺縁起伝承の主人公の一人である檀那の人物像自体も、伝承成立後それほど時間が経過していない段階から既に、特にその悪性の度合をめぐつて微妙に揺らいでいたようなのである。

なお、「盗人ノ様ヲ造_テ」仏師を射殺したというのは、先の平貞盛の話において「山_ニ罷会_テ、強盗ヲ造_テ」医師を殺そうとしたというのと同様であり、それらの背景には、盗賊の出没することの多かった、先述の大江山の当時の環境があつたと言えるだろう。ただし、『今昔物語集』が仏師の襲われた地点とする「篠」は、大江山そのものでなく、その裾野の地域であるのだが。また、冒頭部に仏師について「此ノ仏師ノ心ニ慈悲有_テ」と記すのに対応して、「仏師ノ慈悲有_{ルヲ}以_テ」観音が身代りに立ったと末尾に述べる点、『今昔物語集』特有の捉え方のようである。

右『今昔物語集』頃以降、後出『丹波国穴太寺観音縁起事』の重修年・宝徳二年（一四五〇）頃までには、穴太寺縁起

伝承が、知られる通り、『宝物集』や十卷本『伊呂波字類抄』、『阿婆縛抄』諸寺略記、『元亨釈書』、金沢文庫本『観音利益集』に見える。

七卷本『宝物集』（新日本古典文学大系）巻四は、簡略な記述ながら右の『今昔物語集』と大変近いこと明らかで、仏師の造った観音像が「あまりにたうとかりければ」、「あひしてもちたりける馬を出して、とらせてげり」、ところが、「この馬、おもひみるにおじかりければ、道にゆきあひて、仏師を射殺して、馬をとりかへして馬屋にたてけり」、ということになる。性格についての規定はなく、檀那が必ずしももとの悪人というのではなく感じられる点も、『今昔物語集』と同様である。ただし、上引部に続いて「夜あけてみれば、馬屋に馬もなくて、仏師とおもひて射たる矢、観音にたちてぞ侍りける」と、仏師を襲った翌朝、仏師の安否を知る以前に、奪い返した馬がおらず観音に矢が立っているのを発見したとするのは、それらの発見を、何日も経って仏師の無事を確認したあとのこととする『今昔物語集』とは異なり、その展開のあり方は、むしろ『扶桑略記』や『法華験記』の方と一致している。

十卷本『伊呂波字類抄』（校刊美術史料）「穴太寺」条は、

号菩提寺、在丹波国桑田郡。寛弘年中、宇治宮成請仏師盛世、始奉造観音像。造畢之後、与仏師於録物。生追悔之心、為取返相待大江山。射殺仏師、取返録物。帰奉見菩薩像、胸箭立赤血流出。爰知代仏師被射観音給。彼箭有于今云々。彼観音安置于此寺云々。於彼仏師、全以無羨矣。^{（羨力）}

と、より簡略な記事になっているが、基本的に先引『扶桑略記』あたりとかなり近い。ただ、いくつか相違点も見られる。『扶桑略記』さらに『法華験記』が応和二年のこととするのに対して「寛弘年中」と記す点、特に目立つし、その他、「感世」を誤ったものだろう、仏師の名が「盛世」となっていること、観音に立っていた箭も今に存すること、など挙げられよう。しかし、小稿において最も注意したいのは、傍線部。傍線部の前後を、『扶桑略記』と対照させて示せば、

…其功既畢。檀越施物。宮成本性猛惡。竊進到大江山。隱立途側。射害仏工感世。奪取所与禄物。…〔扶桑略記〕
…造畢之後、与仏師於録物。生追悔之心、為取返相待大江山。射殺仏師、取返録物。…〔伊呂波字類抄〕

前後の内容がぴったり対応・一致するなかで、傍線部が対応しつつ食違っていることに気付かれる。仏師を殺して禄物を取り返すという行動に出た理由を、『扶桑略記』が宮成の本性の猛惡さに求めるのに対して、『伊呂波字類抄』は、後から生起してきた禄物を惜しむ気持ちに求めている。後者の場合、本来的なものではない、一時的に沸き起こった悪心による凶行であつて、宮成は、『扶桑略記』から窺えるような元来の極悪人というのではなく、という印象を与える面がある。その点では、馬を与えたりしていないけれども、むしろ『今昔物語集』や『宝物集』の檀那に近いものがあるように思われる。

『阿婆縛抄』諸寺略記（校刊美術史料）の「穴穗寺」条は、「ほぼ『扶桑略記』所引の縁起と共通し、『法華験記』彰考館本と同文関係にある」（先掲阿部論文）。結果、『扶桑略記』などと同様、「雖造仏像更無善心。只被勸婦女、造立此菩薩也」と、宮成は当初からの悪人で、造像も、女の勧めによるもので自主的なものではないとする。なお、先引彰考館本『法華験記』のうち、「其仏檀越宇治宮成。雖作仏像。專非善人…檀越聞之、弥生怖畏懺悔」という中核部分に相当する記事のみ見られ、その前後の部分は省略されているようだ。

『元亨釈書』（新訂増補国史大系）の場合、卷十七感世伝に穴太寺の縁起伝承が見える。

工感世者、以_レ造_二仏像_一為_レ活。余暇読_二法華_一、或一兩卷、或一二品。多少随_二工之隙_一。又誦_二普門品三十三遍_一為_二日課_一。波州桑田郡有_二宇治宮成_一。命_二世刻_一觀自在像、已而成。宮成厚償_二其価_一。世受_二錢帛_一帰_二洛城_一。宮成忽念而言、「我_二与_二工価_一者多。不_レ如殺_二於路_一奪之。佗人亦不_レ可_レ知也」。則追及_二大江山_一、殺_二世奪_一財而帰。宮成後拜_二新像_一、肩_二上割切_一。從_二其瘡_一血流凝_二地_一。宮成恠怖曰、「我斬_二工_一。像何有_二之耶_一」。便使_二使者_一馳_二都見_一世、世無_二恙_一。使者復_二命_一。宮成

驚^{ワシ}愧^シ而^{シテ}急^ニ詣^リ工^ノ家^ニ、返^シ奪^フ財^ヲ備^フ言^{ハス}所以^ニ。世^ノ曰^ク、「我^ハ於^ニ大^ノ江^ノ山^ニ逢^フ賊^ヲ。被^レ掠^ル財^ヲ、潜^ニ逃^グ歸^リ家^ニ耳^ヲ。今^ニ聞^ク君^ノ言^{ハス}、大^ノ悲^ノ尊^ノ代^ノレ吾^レ受^ル刑^ヲ也^ヲ」。二^ノ人^ノ執^リ手^ヲ感^ズ嘆^ス。自^レ此^ノ宮^ノ成^ル与^リ世^ノ盟^ス親^ノ友^ニ。于^ニ時^ニ応^ズ和^ス二^ノ年^ヲ。其像今在ニ菩提寺一。俗云ニ六穂寺一。

全体的には、『阿婆縛抄』諸寺略記が同文関係にあつた彰考館本ではない、それ以外の『法華驗記』の方に近いようである。特に波線部あたり、『法華驗記』の「往寺開戸奉見新仏、金色觀音御肩被切割、從其痕中赤血流下、滿地凝結」と対応して、しかも、觀音に矢が立つのでなく肩を切り割られている点や、その傷から流れた血が地面で凝固していたという点は、ここまで見てきた諸文献の中では『法華驗記』のみが有する要素である。しかし一方で、『法華驗記』にはない、「佗人亦不^レ可^レ知也」（破線部）という、『今昔物語集』の「盜人様造^テ」と対応するような記事や、宮成と感世が最後には親友となる展開が見られたりもする。そして、『法華驗記』と相違していて特に注目されることには、宮成の性格を規定する例の辞句「專非善人。不善武者也」に相当するものが、右記事中には見られない。また、感世への代価の多少が問題になっている（実線部）ことにも注意される。觀音の出来栄が見事だったからなのか、宮成は一旦は「厚」く代価を払う。ところが、感世がそれを受け取つて帰つていったあとに、代価が「多」かつたと後悔し、殺して奪い返そうと考えるのである。それは、仏師が速く美麗に造つてくれた、その喜しさのあまり愛馬を与えるが、仏師が帰り馬がいなくなると、どうしようもなく愛惜する気持ちが募り、ついに殺して奪い返したという、『今昔物語集』における郡司に近いものがある。全体的には概ね『法華驗記』と共通しつつ、その中に登場する檀那宮成の人物像は、『今昔物語集』の場合に多少近い、必ずしも本来の悪人とは言い難い存在に入れ替わっているのだと言えよう。

『觀音利益集』（古典文庫）の場合は、先の諸文献に見られた種々要素が混在しているかのように見える。仏師（『伊呂波字類抄』と同じく「盛世」とする）について「毎日^ニ觀音經三十三卷」を讀誦し「十八日ニハ必ス持齊ヲシケリ」とするのや、檀那が最後に「本尊仏師ニカハリ給ケルコトヲ、且カタシケナク、只我シワサノ邪見サヲカナシミテ、忽^ニ心ヲヒルカ

エシ、道心ヲ発テ一筋ニ観音ニ仕リケリ」ということになったと記すのは、『法華験記』や『今昔物語集』と同様である。一方、仏師を射殺したあとに観音を拝すると、「御頸ホトヨリ血流出テ、シカモカタフカセ給ヘリ」という状態だったとする、そのうち、傷を受けたのが「頸ホト」であるというのは先の諸文献のいずれとも異なるが、「カタフカセ給ヘリ」は、ここまで取り上げた中では『扶桑略記』のみに見られた「金体如悩、少低而立矣」という内容に通じるものと言えよう。さて、この『観音利益集』は、観音の造立がなったあとの場面を、次のように記している。

…其ノ施主仏師ニ種々祿物ヲトラセツ。仏師京ニ帰リ登ル時、人夫伝馬ニ至マテ沙汰シ当ヘテ、施主思様、「此祿物莫大ナリ。道ニ行合テウハイ取ラムニ、人夫メラハ見知リタレハ、ヨモ惜シ。仏師ハナニホトノコトヤアラン」ト、下人等ニ云合テ、即チカム道ヨリ□イノ山ヘ先キサマニ行テ待ツ所ニ、思ヒヨラヌコトナレハ其用意モナクテ、仏師登ル所ヲ只一矢ニ射コロシツ。…

人夫や伝馬を沙汰したというのは、仏師が「京ニ帰リ登ル」ためには大江山を越えなければならない、その道中の便を図つたものであつて、『今昔物語集』や『宝物集』が愛馬を与えたというのとは意味合いが異なるけれども、それから連想されて出てきた要素という面もあるうか。それはともかく、右引部の中で、与えた「種々祿物」について「此祿物莫大ナリ」と施主が思つて仏師を襲うことになっている点、右引部だけでなく全体のどこにも「本性猛悪」（『扶桑略記』）「専非善人。不善武者也」（『ナシ』（『法華験記』）に対応する辞句の見えない点と併せて、注意される。この施主についても『元亨釈書』の場合と同様で、観音を造つてくれた仏師に、一旦は気前よく祿物を与え伝馬まで沙汰するが、仏師が出立してからその莫大さに気付いて後悔したということらしく、やはり、少なくとも「本性猛悪」というような根っからの悪人というわけではなく感じられよう。

これら『今昔物語集』頃以降の鎌倉期あたりの諸文献においては、『阿婆縛抄』諸寺略記以外いずれも、『今昔物語集』

よりも顕著ではないものの、それに近く、『扶桑略記』『法華験記』におけるような当初からの本来的な悪人というのでは必ずしもない、幾分なりとも悪人離れした檀那の人物像が窺えるようであった。全体的な傾向として、檀那の悪性を弱め、檀那が悪人から離れていく、そういう方向に傾いていたと言えるだろうか。

四 善女人の檀那——宝徳二年重修『丹波国穴太寺観音縁起事』から延宝四年縁起絵巻まで

先述通り、『扶桑略記』が末尾に「已上穴穂寺縁起」と注していて、わずかに「穴穂寺縁起」と称する独立した一書の存在を窺わせているが、それ以外右に見てきたのはいずれも、何らかの文献の中に一部として穴太寺の縁起伝承が著録されたものばかりである。それに対して、まさに独立した一個の縁起書が、中世には出現してくる。同縁起は、国史学などからの記述にはしばしば取り上げられているが、国文学分野の中では、その存在に対する認識が従来全く欠落してしまっている（後出「*『丹波国穴太寺観音縁起事』の伝本」参照）。その縁起とは、穴太寺などに伝本が所蔵される『丹波国穴太寺観音縁起事』一卷である（引用の際は穴太寺所蔵本に拠る）。すでに全文翻刻もなされているが、誤読等いくらか見られるようなので、小編集に改めて全文を掲げておいた（編末資料A）。「箱書から延宝四年（一六七六）光子内親王により寄進されたことがわかる」（『新修亀岡市史』資料編第四巻⁴⁵³頁）とされる穴太寺本の箱は見出せていないが、同本末尾には確かに「宝徳二年秋八月時正日重修之」と記されていて、「宝徳二年（二四五〇）に書写されたことを明らかにしている」（同上）。成立自体がいつのことかは不明だが、末尾部に「承久年中」（一二一九〜一二二）の記事が見えるので、それ以降宝徳二年までの間の成立ということになる。

相当にまとまった分量を備え、内容的には、従来の縁起伝承とは異なる、いくつかの顕著な特徴を有している。ここには、特に注目すべきものを四点挙げておこう。

まず、観音の靈驗縁起譚の前、冒頭部に、穴太寺が文武天皇の慶雲年中古磨大臣による草創であり、その際の本尊が薬師如来であつたと記す（編末資料A2く5行）点、すぐに目に付く。いずれも、前節までに取り上げてきた諸文献には見られない内容で、『扶桑略記』などが何ら言及していなかった、観音造立以前既存の「寺」自体について最初に、記しているのである。薬師^⑧について、『寺門高僧記』（続群書類従）巻四収載行尊「観音靈所三十三所巡礼記」の「菩提寺」条にも「等身薬師聖観音。三尺金色。丹波桑田郡」と見えるのであつて、慶雲年中古磨大臣草創というのはともかく、観音造立以前に薬師信仰の寺院としてあつたという点は、史実と認められようか。腹を患い穴太寺に逗留していた一遍が結願の朝に本復したと、『一遍聖絵』巻八が伝える背景にも、観音の蔭に隠れた穴太寺の薬師に対する意識があつたのかもしれない。なお、同じ『寺門高僧記』の巻六に収載の覚忠「三十三所巡礼記」には、穴太寺について「願主聖徳太子御建立」と、慶雲年中古磨大臣草創というのよりも時代的にさらに遡らせた開創説を伝えている。

次に、冒頭の草創や薬師に関する記述に続いては、観音の靈驗縁起譚がかなりの分量、末尾近くまで載せられていて、その内容は先に見た諸文献の記述とごく基本的には同様であるのだけでも、特には、宮成の妻が登場し、非常に重大な役割を演じている点で大きく異なっており、最大の特徴として注意される。悪人の宮成に対して善人の妻という対比的な設定がなされていて（9く15行など）、妻が宮成に対して教戒の言葉をかなり長く浴びせていたりもする（27く47行）。そしてついには、宮成の妻は、「極悪の夫を教化せむために」観音が化身したものでないかとさえ述べられている（82く85行）。また、宮成は妻の教戒にしぶしぶ応じて秘蔵の馬を感世に与えてはいるが（48く51行）、そもそも感世を招いて観音を刻ませた（16く18行）のも、完成後に禄物をまず施与した（22く24行）のも、宮成ではなくて妻になっているのであつて、観音造立の檀那と呼ぶべき人物が、従来の諸縁起伝承における宮成から、その妻へと、半ば以上移行しているとも言えよう。さらに、宮成の妻について『丹波国穴太寺観音縁起事』は、「此婦造立の間は、毎月一七日を点して持斎清浄にし

て、殊に信心をこらし、毎日法華經一部并普門品三十三卷を讀誦し奉る」(18く22行)とするが、それは、例えば先引『法華驗記』記事冒頭に「沙弥感世。以造仏像為其所作。而誦法華經。毎日必讀一品一卷。其中暗誦普門一品。日々必誦三十三卷。又(毎月)十八日持齋。奉仕觀世音「ナシ」菩薩(以為業)」とするように、従来の諸伝承では、仏師感世の所業とされてきたことである。『丹波国穴太寺觀音縁起事』における宮成の妻は、觀音に、檀那宮成、そして仏師感世と、従来の諸伝承における各登場人物の持っていた役割のそれぞれ一部を、一身に吸収・集約させたような、そんな存在と化しているのである。

第三には、前非を悔いた宮成が、「我家をこぼちて其跡に御堂をつくり、菩提寺となつて、尊像を安置せむ」と企図していると、「願は穴太寺の薬師如来に値遇し奉りて、衆病悉除の本誓にまかせて、我身の苦悩をやすめん」といった觀音の夢告を得て、穴太寺に堂を建てて安置した、という内容が末尾部に見られる(85く95行)点、これまでの諸伝承には見られなかったもので、特徴的である。そもそも先に見てきた諸伝承は先述通り、觀音造立の縁起譚や觀音の靈驗利益譚ではあっても、必ずしも明確には穴太寺の縁起譚にはなっていない。それに対して、『丹波国穴太寺觀音縁起事』が、「夫当寺草創の昔を尋ねれば……」と、第一の特徴として挙げたように穴太寺の草創から書き起こすのは、『丹波国穴太寺觀音縁起事』という書名を有しながら、全体としては穴太寺自体の縁起を構築しようとしたものであることを、明らかに示している。右の末尾部の内容はそれと呼応するものであつて、造立になった觀音が夢告して、冒頭部において草創時の本尊と規定された薬師と共に穴太寺に安置され、先引行尊「觀音靈所三十三所巡礼記」が「薬師聖觀音」とする、まさにその通りになったという展開は、独立し遊離しがちであつた觀音の靈驗縁起譚を、穴太寺縁起という枠組の中にしっかりとつなぎ止め位置付ける結果を導いてもいよう。なお、宮成が我家の跡に御堂を造り「菩提寺」と名付け觀音を安置しようとしたが、觀音の夢告あつて「穴太寺」に安置することになったという、右末尾部の内容は、「菩提寺号三六
德寺」(先引『扶桑略記』

などが菩提寺Ⅱ穴太寺とするのと微妙に食違う。あるいはその内容には、上の二つの寺号を有することになった何らかの事情の一端が暗示されているだろうか。

第四の特徴としては、右の末尾部の後にさらに続けて、二百余年後に再度観音の夢告が「むかしの箭の痕朽破れて、尊容末代までとまりかたし。……」とあり（「我身の苦悩をやすめん」と衆病悉除の本誓を頼って、穴太寺の薬師に値遇したはずであるから、これでは、薬師の効力がなかったことになりそうだが）、それに従って新菩薩を造立、共に安置したことを伝えている（99～105行）点を挙げなければなるまい。浅野清編『西国三十三所霊場寺院の総合的研究』（中央公論美術出版、平2）は、札所本尊観音の前立像が「藤末鎌初の中央作」で、右の「新菩薩に相当すると思われる」という見方を示している。

さて、右のような特徴を有するこの『丹波国穴太寺観音縁起事』は、先述通りその成立自体承久年中を遡ることができないのであって、無論のこと、その中には後発的な要素を多く含んでいることであろうが、しかしだからと言って、先に見てきたうち承久年中より遡るような早い段階の『扶桑略記』所載「穴穂寺縁起」や『法華験記』の所伝と比べて、すべて後発のものであるとは、必ずしも言い切れないだろうと思われる。

例えば、先述通り、妻と対比する形で「善苗耳に逆り、悪業心に逞して、凡名聞利養のいとなみの外はさらに生死無常のことはりをしらす」（9～12行）と、宮成は当初から極悪人として規定されているが、それは、「本性猛悪」（先引『扶桑略記』二重傍線部）「専非善人。不善武者也」〔ナシ〕（先引『法華験記』二重傍線部）と共通するものであり（ただ、同じく本来的な悪人であっても、その規定された悪の中身・性格はやや異なっているようか）、そういう規定は、先に取り上げたものの中では彰考館本『法華験記』と同文の『阿娑縛抄』諸寺略記以外、『扶桑略記』『法華験記』以降には見られないものであった。また、『丹波国穴太寺観音縁起事』では、「宮成是を見といへとも、一念慚愧の心なくして、剩不受のおもひ

顔色にあらはれたり」(24～26行)↓「宮成婦人の言に恥て、本意とはおもはねとも、をのれか秘蔵しける葦毛の馬を仏師にあたへけり」(48～51行)↓「宮成不思議の思ひをなして、かつく懺悔の心をおこす」(60～62行)↓「宮成是より前非を悔て、つゝに仏道に進修せり」(81～82行)と、宮成が徐々に改心していく様が丹念に辿られている(絵巻に描かれた宮成の表情も、次第に柔和になっていく。その点は『新修亀岡市史』資料編第四巻²⁸⁹頁参照)が、その心理変化は、『今昔物語集』に見られたような、嬉しさのあまり一旦施与した愛馬を愛惜し葛藤しながらついに凶行に及ぶという揺らぎとは異なり、究極的な悪心から正反対の善心への直線的な変化であつて、それによつて、如上の揺らぎを見せる『今昔物語集』の郡司と同じようにもともとそれほど悪人ではない、と感ぜられることもなからう。『丹波国穴太寺観音縁起事』の宮成は、『今昔物語集』の郡司や、あるいは先述通りある程度それと同様の傾向を持つそれ以降の『伊呂波字類抄』『元亨釈書』などの檀那とは違い、『扶桑略記』『法華験記』の宮成・檀越と同じく、根っからの悪人として出発している。

また、『丹波国穴太寺観音縁起事』における、先述通り半ば檀那の位置に立っている妻のあり方、そして、「かつはうらみかつはいさめ」て宮成に「をのれか秘蔵しける葦毛の馬を仏師にあたへ」させた(47～50行)というその言動は、先引『扶桑略記』の「依^二婦女勸^一企^二造仏思^一」や先引彰考館本『法華験記』の「只被勸婦。如此造立此菩薩也」を想起させるのであり、それらと対応するものであるに違いなからう。そして、そうした内容は、『今昔物語集』以下の先に取り上げた諸文献には見られないものである。

このように、『丹波国穴太寺観音縁起事』には、前節までに見た中で早い段階の『扶桑略記』あるいは『法華験記』とのみ共通・対応する要素が、いくつか見られるのである。そういう早い段階のものにしか出てこない要素をも組み入れ従来諸伝承を総合しようとしたのだと見ることも、もちろん可能であるけれども、別の一つの可能性としては、『丹波国穴太寺観音縁起事』に元来古態を留めている面があつて、結果、右のような要素が含まれることになったとも考えられよう。例

えば、原縁起と言うべきものが早くに穴太寺にあって、『丹波国穴太寺観音縁起事』は主にそれに基づいたものであり、一方、『扶桑略記』所載「穴穂寺縁起」あるいは『法華験記』も同様に、その原縁起に発して、それで、両者にのみ共通・対応する要素が見られたりする、というようなことも有り得なくはないだろう。

さらに、先に特徴として挙げなかったが注目されることには、『丹波国穴太寺観音縁起事』には、「種々の禄物」(22～23行)と共に宮成が「秘蔵しける葦毛の馬」(50行)を仏師感世に施与するが、「宮成此馬を惜くや思ひけん」(52行)、仏師を射殺し馬を取り返し厩に繋ぐ、ところが、やがてその馬がいなくなり、仏師の家の厩に繋がれていることがわかる、という内容を中心部分に含んでいる。それらの内容は、先引『今昔物語集』に見られたのとはほぼ共通する。馬が施与されるのは、ここまで見た中では『今昔物語集』以外『宝物集』の簡略な記事だけであって、『丹波国穴太寺観音縁起事』における『今昔物語集』との如上の共通性は、特に注目される。右に述べたように、例えば、原縁起と言うべきものが早くに穴太寺に存在していて、それに依拠した『丹波国穴太寺観音縁起事』にその姿がある程度留められているとするならば、『法華験記』など以外「他に主たる典拠があったと想定される」(先引日本古典文学全集)『今昔物語集』所載話が、典拠とした資料の面影を、この『丹波国穴太寺観音縁起事』に見ることができるかもしれない。

右のようなことを可能性として考えさせる宝徳二年重修『丹波国穴太寺観音縁起事』は、先述通り従来国文学の側では全く視野に入れられておらず、『今昔物語集』の諸注釈などにおいて言及されることもないが、『今昔物語集』所載話を含め穴太寺縁起伝承について検討するうえで欠かせない資料であるに違いない。

なお、『丹波国穴太寺観音縁起事』が観音造立を寛弘七年のこととするのは、他が多く応和二年とするのと異なるが、ただ、『伊呂波字類抄』とは同じ。また、宮成が感世を襲ったという「大江山舛井辺」(53行)は、歌枕「増井の清水」のあった辺のことだろう。同歌枕の旧地には寛永八年(一六三一)の題目碑が立ち、老ノ坂トンネル西口の路傍には、その旧地

から移されたという増井観音石像が祀られてもいる（『新修亀岡市史』資料編第五巻など参照、一〇二〇頁）。

右の『丹波国穴太寺観音縁起事』は、知られる通り、近世になって再生され、絵巻化されることになる。その縁起絵巻は穴太寺に所蔵されており、詞はほとんどそのままに（編末資料A参照）、随所に計九場面の絵を配している（尾崎久彌『三つの絵巻』〈観音瞻仰会、昭10〉や『新修亀岡市史』資料編第四巻参照）。末尾に「此一巻依穴太寺住持／行広所望染筆者也／二品（花押）親王」と見え、穴太寺「中興初代」の行広（元禄十二年没、行年六十三、京都大学文学部図書所蔵臨写本『穴太寺旧記』収載明治五年「世代調書」覚に拠る）の依頼によって、「二品親王」が詞を書写したものと知れる。また、最後の絵の左下に「延宝四年丙辰夏六月 日／狩野永納筆」と記されており、本絵巻の成立が延宝四年（一六七六）の六月であること、絵が狩野永納によるものであること、判明する。さらに、貞享二年（一六八五）の永納『鳥跡記』（『香椎潟』37収載井上敏幸氏翻刻）に、この絵巻について「（仮名）かんなの縁起あり。文の詞ハ梶井の宮の御筆也。絵は予かけり」（傍記稿者）などと記述あつて、「二品親王」とは梶井宮盛胤親王（『梶井門跡略系譜』によるに、御水尾院皇子、延宝二年叙二品、同八年遷化）のことと考えられる（五十嵐公一「永納作品の制作年代」『塵界』11、平成11。兵庫県立歴史博物館特展図録『狩野永納』〈平11〉等も参照）。穴太寺は、絵巻が作成された延宝四年に火災に遭つていて、その時、「復興の志を募るために、京都に於いて聖観音像の開帳を行つた際に、五月二十七日には特に像を殿上に請じ給ひ、御拝の御事があつた」のであり、さらに、「後水尾天皇の皇女光子内親王は当時紺紙金泥の普門品を書写してをられたが、霊像を礼拝された御喜びの詞を跋に添へて、その経を当寺に施入されたのが、今猶存している」（『京都府史蹟名勝天然紀念物調査報告』第十七冊、京都府、昭12、西田直二郎・赤松俊秀両氏担当、42頁）。これら一連の事柄が、「二品親王」が筆を執つたりした本絵巻の製作事情と、密接に関係しているのだろう。

＊『丹波国穴太寺観音縁起事』の伝本

『丹波国穴太寺観音縁起事』は、宝徳二年重修縁起と、それを絵巻化した延宝四年縁起絵巻と、二種存することになるが、例えばそれらを最も詳細に取り上げる最新の『新修亀岡市史』も、それらの伝本として穴太寺所蔵の各一本のみしか取り上げていない。しかし、今回他に二本の伝本を確認することができた。四天王寺国際仏教大学恩頼堂文庫所蔵写本と金沢市立玉川図書館加越能文庫所蔵『松雲公採集遺編類纂』巻十四収載写本である。前者については最近に整備された『四天王寺国際仏教大学所蔵恩頼堂文庫分類目録』（四天王寺国際仏教大学図書館、平15）にて、後者については原田行造『本朝法華記』所収説話の諸特徴（上）付「報告」諸本の現況とその概要―（『金沢大学教育学部紀要』22、昭48）の中での言及によって、知り得た。編末に、穴太寺所蔵宝徳二年縁起の全文翻刻を掲載し、併せて、穴太寺所蔵延宝四年縁起絵巻及び右二本との校異を傍記した（編末資料A）。

穴太寺所蔵の両本の書誌的概要については、『新修亀岡市史』資料編第四巻など参照。なお、穴太寺所蔵本のうち宝徳二年縁起の方については、昭和十二年の臨写本（他の文書類と併せて臨写、「丹波穴太寺文書」と称されている）が京都大学文学部古文書室に所蔵されている。

恩頼堂文庫本（整理番号一一八〇）は、近世末写。卷子本一軸。縦二七・四糎。未装丁で、紙片を巻いて紐で結んである。その紙片に「丹波国 穴太寺／縁起事／写」と墨書。楮紙。押界あり。全百四十行。外題なし。内題「丹波国穴太寺観音縁起事」。本文のあとに一行空けて、奥書「宝徳二年秋八月吉辰」。穴太寺所蔵本奥書と若干異なるが、それによって、宝徳二年縁起の方の写本であることが、明らかに知れる。穴太寺所蔵本第105～106行「靈驗あらたにして」が「靈驗いよくあらたにして」となっているのが最も大きな違いであって、穴太寺所蔵本との本文の相違はごく僅かである。穴太寺所蔵本第6行中の割注「就寺号雖有子細／依事繁且略之」の末尾三字「且略之」を、恩頼堂文庫本が本行に組み込んでいるのは、明らかな誤写。

加越能文庫本は、前田綱紀（松雲公）が採集したものを明治になって類纂した『松雲公採集遺編類纂』（一六・〇三一）全百九十冊のうち第十四冊の中に、他の諸寺院縁起と共に収載されている。十一丁に亘って書写されており、每半丁八行。冒頭に内題「丹波国穴太寺観音縁起」。末尾に改丁して、「此間見申売本之覚／一丹波国穴太寺観音縁起古書 一卷／持主丹波国町人名不知／

取次玉屋吉兵衛／貞享三年四月十八日 津田太郎兵衛／代過分之望無之候早速二入披見候」と、少々興味深い覚書が記されている。加越能文庫本が購入された際の覚書か。他本いずれも「丹波国穴太寺観音縁起事」と題するのに対して、加越能文庫本の内題には右引通り「事」がないが、この覚書に見える書名にも「事」がない。奥書は記されておらず、宝徳二年と延宝四年とどちらの年記も見えないので、加越能文庫本が、本文にほとんど違いのない宝徳二年縁起と延宝四年縁起絵巻詞章のいずれの写本なのか、判定し難い。ただ、右引覚書が該本購入に際してのものであるなら、購入された貞享三年（一六八六）時点でそれを「古書」と記しているのだから、十年前の延宝四年（一六七六）成立の縁起絵巻の写本であるよりは、宝徳二年縁起の写本である方が相応しいだろう。宝徳二年縁起の「不思議の思ひをなしてかつく懺悔の心をおこす」（61く62行）を「不思議のかつし懺悔の心をおこす」と、明らかに誤脱・誤写した事例も見られ、良質の本文とはいえない。

なお、穴太寺所蔵本のうち、宝徳二年縁起は、『観音信仰と社寺参詣—丹波・丹後—』（京都府立丹後郷土資料館特別展図録一六、昭60）に首尾部の写真及び全文翻刻、『新修亀岡市史』資料編第四巻に首尾部の写真、図録『西国三十三所—観音霊場の信仰と美術—』（日本経済新聞社、平7）に冒頭部写真が、各々載る。延宝四年縁起絵巻は、先掲尾崎久彌『三つの絵巻』や先掲『京都府史蹟名勝天然紀念物調査報告』第十七冊、『文学の旅—名作の舞台を訪ねて—』（亀岡市文化資料館、昭62）、『新修亀岡市史』資料編第四巻に、ほぼ全部または一部の影印と全文翻刻が収載される。ただし、いずれの翻刻にも若干のミスなど存する。

先述通り宝徳二年縁起と延宝四年縁起絵巻のいずれの写本か判然としない加越能文庫本に右掲原田論文が触れてはいるけれども（その素性についての追究は何らなされておらず、上記いずれかの写本であるという認識さえ示されていない）、それ以外国文学の側の記述には従来、宝徳二年縁起に言及したものを見ない。右の如く全文翻刻もなされ、国文学以外の諸方面からは種々記述され、さらに現在穴太寺境内に立つ案内板にも引用されているが、今まで国文学の方の研究者の目をすり抜けてきたものであるらしい。松本隆信「贈訂室町時代物語類現存本簡明目録」（奈良絵本国際研究会編『御伽草子の世界』三省堂、昭57）が、「穴太寺縁起」の項目のもと、縁起絵巻のみで宝徳二年縁起に言及しない先掲尾崎久彌『三つの絵巻』によって、伝本を「延宝4年絵巻大一軸」のみとしたのを、受け継いできた結果であろうか。最近の徳田和夫編『お伽草子事典』（東京堂出版、平14）の「穴太寺縁起」条（濱中修氏担当）も、「延宝四年（一六七六）写の絵巻が現存するのみ」とする。穴太寺に限らず、寺社縁起の研究は、

対象とすべき縁起の存在の把握自体にまだまだ不十分な面が極めて多いことであろう。

*「わらくつ一双」

宝徳二年重修『丹波国穴太寺観音縁起事』にも延宝四年縁起絵巻にも、「さてかの厩をみれば、つなける馬はなくして、たゞわらくつ一双のみあり」と見える（編末資料A 62～64行）。仏師感世を射落として帰宅した宮成が、自らの放った白羽の矢が観音の胸に立っているのを見て驚き、厩を見ると、取り返して繋いでおいたはずの馬もいなかった、という場面。「わらくつ」とは、後世の編末資料BやCも「無馬而唯藁沓一双也」「馬はなくして唯藁沓一双のみあり」とするように、「藁沓」であるに違いない。

ところで、人が消えていなくなるという話が、沓だけが遺されていたという言わば遺沓譚を伴った事例を、しばしば目にするところがある。棺に片方の沓を遺して消え去ったという有名な達磨の話を始めとする、同様の内容の戸解譚が、中国仙伝などに数多く見られるし、日本でも、沓を遺して行方・死所が知れなくなる、言わば死所不明型戸解譚が、武内宿禰や天智天皇、行劔、円仁、仲算、聖宝、淳祐について伝えられている（拙稿「死所不明型戸解譚—戸解譚史断章—」参照、『日本宗教文化史研究』6—1、平14）。さらに例えば、沓が遺されていたと直接記載されている訳ではないが、『住吉松葉大記』（大阪市史史料第五十五輯）の巻六撰末部八にも「御履石……俗説ニ謂ラク、神宮寺ノ僧想応和尚此ノ所ヨリ登天スト」。さらには西洋のシンデレラの話なども含めて、こうした遺沓譚の体系的な検討が必要だろう。それはともかく、馬がいなくなって「わらくつ一双」が遺されていたという右の事例も、そんな遺沓譚の伝統を継承しているだろうか。

本誌前号収載拙稿『天竺往生験記』に関する二、三の覚書」付載『女子大國文』前号収載拙稿『魂を飛ばす仙人小野篁—「本朝列仙伝」贅注—』補足』の中で、『平安城五条橋造立勸進帳』中の記事「小野篁魂神還幽途脱置沓於此所」について、『花洛名勝図会』や下坂守「法城寺・晴明塚考—五条河原・清水坂に生きた人々の信仰—」（『描かれた日本の中世』法蔵館、平15）に示されるように「還幽途」を『幽途より還る』と読んだ場合、続く『脱置沓於此所』が、魂神がこの世に戻るに当たって、その入口で沓を脱ぎ置いた、ということになる点、少々不自然なように感じられる。『幽途に還る』であって、この世での沓を入口に脱ぎ置いて冥途と往還していた、ということかもしれない」と述べたが、右の遺沓譚の伝統を踏まえて考えるならば、尚更そのように思われる。沓を遺して冥途へと消え去っていた、と捉えれば、遺沓譚の型に当てはまることになるからである。また、実際、見聞系和漢朗詠

集注釈のうち東京大学文学部国語研究室蔵『和漢朗詠集見聞』（『磯馴帖』村雨篇、和泉書院、平14）には、三守を蘇生させた話の中で、「御女イソキ婦リテ見玉へハ、篁イソキ走り出テ玉フトテ、アマリニアワテ、履片方ヲ手ニトリテ東山ヲサシテニケ玉フ。北ノ方ツヽイテ逐玉へハ、ヲタキノ塔ノ下ヘニケ入テ、クツヲハソコニ捨テ失玉フ。……権者ハ本地ヲ知レヌレハイソキカクレ玉フ也。ヲタキノ道ヲ六道ノ辻云ハ彼ノ篁ノメイトヘ帰シ道ナルカ故也」と、篁が沓を捨てて冥途に帰つたと記されている。ただ、同じ見聞系和漢朗詠集注釈でも国会図書館所蔵『和漢朗詠注』（『和漢朗詠集古注釈集成』第二巻、大学堂書店、平6）では、「篁、アハテ、御履ヲハカレケル。カタ／＼ヲハ手ニサケテ、東山ヘニケ給フ」と記されるものの、履を残して冥途にはいったとは明記されていないが。

右の宝徳二年重修の『丹波国穴太寺観音縁起事』とそれに基づく延宝四年の縁起絵巻との中間くらいの時代においては、いわゆる直談系の法華経注釈書類に穴太寺縁起が記されているのが、目立つ。それらは、『丹波国穴太寺観音縁起事』の伝承内容との何らかの繋がりを、幾分感じさせるような部分を持つてもある。そして、檀那の人物像が従来以上に大きく揺らいだ事例が見られ、その点、特に注目される。

栄心『法華経直談鈔』の金台院蔵写本には、

昔京眼精云仏師有。毘首羯磨不負一程上手也。此仏師毎日観音経卅三巻読也。或時丹波国宮成云人、此仏師呼下、観音一体卅三日間作出申也。如夫一作出也。宮成過分作料出、其外色々引出物出ケリ。宮成能々思ヘ、此料足等惜故、何トモ有取還ト思、丹波大江山スソニ待打殺、料足等取還家帰也。後聞ケハ、此仏師無相違ニ京居仏作云也。宮成聞之、不思議事也思、持仏堂行見レハ、我作セクル観音疵多有。殊右脇ヨリウミシル出也。是何事云、此仏子師毎日観音経卅三巻読故也。此時宮成発道心一出家、我家寺成名ニ菩提寺一。此観音本尊安置也。此丹波穴太観音申也。

と、穴太寺縁起が取り入れられている。寛永版本では、末尾の一文が「此丹波穴太観音也」となっていて、「穴」の草書体

を「ユル」と誤読したらしいものが見られたりする。また、同じ栄心の著作で、『直談鈔』普門品のみをとりあげて書名を付したものの（廣田哲通『中世法華經注釈書の研究』299頁、笠間書院、平5）と言うべき『観音品直談顯說鈔』（金沢市立玉川図書館金陽文庫所蔵寛文七年版本。京都大学附属図書館・龍谷大学図書館にも刊年不明版本が所蔵される（日藏未刊五五・二四一、三／一〇W）。内題・目録題を「観音經功德鈔」とし、それらの下に「天台沙門慧心集」、外題を「観音經功德抄」（打付書）・「說観音經直談天台沙門慧心」（刷題簽）とするのは、金陽文庫本（内題・目録題「観音品直談顯說鈔」（抄））両題下「天台沙門榮心集」外題「観音品直談顯說抄」と異なるが、柱題「顯說抄」は同本と同じ）にも、

昔シ京眼セイト云仏師アリ。ヲヨソ毘首羯磨ニモヲトラヌ上手ナリ。コノ仏子毎一日観音經ヲ三十卷ヅ、誦スルナリ。アルトキ丹波ノ国ニ宮成ト云人アリ。此仏師ヲヨビ下シテ、観音ヲ一体三十日間ニ作クリイダセト申サル、ナリ。如^レ其ツクリイダスナリ。宮成過二分料引出モノヲイダシテ上セタリ。而ルニ宮成ヨク／＼思ヘハ、料足等ノヲシキユベニトリカヘサント思ヒ、丹波ノ大江山ノスソニ待テ、仏師ノカヘル処ヲ打殺シテ料足等ヲ取返シテ家ニカヘルナリ。ソノ、チキケバ、此仏師ハ相違ナク京ニ居テ仏ヲツクルトイフナリ。宮成コレヲキヒテ不思議ニ思ヒ、持^レ仏堂ヘユイテミレバ、我力造ラセタル観音ニ多ノ疵^{キス}アリ。コトニ脇^{ワキ}ヨリウミシルイヅルナリ。コレハナニ事ゾトイフニ、此仏師毎一日観音經三十卷ヅ、ヨムユヘナリ。宮成此トキ道心ヲ發シテ出家シテ、我家ヲ寺ニシテ菩提寺ト名ヲツケテ、此観音ヲ本尊ニ安置スルナリ。コレヲ丹波ノユル太ノ観音トイフナリ。と同様に見える。この場合も、「ユル太ノ観音」と誤っている（末尾。目録部にも「丹波ユル太ノ観音事」。また、金台院蔵写本も寛永版本も「卅三卷」「卅三日」とするところを、「三十卷」「三十日」と記す（傍点部）。

さて、これらは、特別に変わった内容になっているわけではない。作料等が過分であるため惜しくなるのは、『元亨釈書』や『観音利益集』と同様で、仏師が無事であることを聞いたあとで、宮成が観音の傷を目撃するのも、『今昔物語集』

と同様である。ただ、金台院本では右脇、寛永版本や『観音品直談頭説鈔』では単に脇であるが、観音がそこから膿汁を流していたとするのを始め、毘首羯磨を引合いに仏師の上手さを強調する点、造立の期限（三十三日間または三十日間）を設けたとする点（『今昔物語集』では、「三月許」で造ったのが「疾く造奉れ」とされていた、その約三倍の速さ）など、細部の要素ではあるが、ここまで取り上げた中には見られないもので、目を引く（各実線部）。また、仏師の名「眼精」「眼セイ」は、「感世」の訛伝だろう。特に注意したいのは、「我家寺成名ニ菩提寺」此観音本尊安置也（金台院本）「我家ヲ寺ニシテ菩提寺ト名ヲツケテ、此観音ヲ本尊ニ安置スルナリ」（『観音品直談頭説鈔』という末尾部の記事（破線部）。先の『丹波国穴太寺観音縁起事』において宮成が企図した内容「我家をこほちて其跡に御堂をつくり、菩提寺となつて、尊像を安置せむ」（85〜87行）と、一部は表現面まで近く、しかし一方、前者の方は実現した事柄として述べるのに対して、後者の場合は、観音の夢告に従い穴太寺に安置されることになるのであつて、企図されただけで結局そうならなかった、という点で、正反対でもある。両者に何らか関係し合う面があるかどうか、何ともわからないが、関係があつたとした場合には、穴太寺が中世において比叡山西塔院末の天台寺院であつたこと（穴太寺蔵応永十八年八月二十四日『足利義持御教書』に「山門西塔院末寺丹波国穴太寺」などあり、しばしば指摘されるところ）が、その背景にある事情として想定されることになろうか。

なお、右の末尾部の記事によれば、観音造立後に菩提寺すなわち穴太寺が創建され、観音もその本尊として安置されたことになりそうだが、それは、『扶桑略記』や『丹波国穴太寺観音縁起事』におけるような、観音造立以前に寺があつたとする従来の諸伝承と大きく異なることになる。

『直談因縁集』（和泉書院刊翻刻）巻八13は、極めて特徴的な内容を備えている。

付二賊ヲ除ト云。丹後ノ国ニ女アリ。観音ヲ作ント思イ、代ヲ用意シテ、都ヨリ仏師ヲ下ト云テ、ヨヒ下ク、作ラセテ、代ヲ多ク出ス也。時、

盗人共、是ヲ奪取^{ント}思、為^ニ打殺^シ。道ニテ待也。代多ク持也。往程ニ打殺^ス也。時、言語〔道断〕^{トテ}云テ、都ハ人ヲ遣^シテ、其ノ由ヲ聞^ニ、無相違^ニ帰^ト云。^云〔五字分空白〕而、此所作一仏、アラウヤ、ト云ケリ。サレハ、不思議也、ト云テ、持仏^ニ堂^ニ至^リ、見^レハ、懸^テ血^カ出^{ケル}ト云。^云アナウノ観音是也。此故ニアナウト申也。^云此穴尾ノ観音、桓武帝ノ御代、応和二年立ナリ。^云

冒頭部の「丹波ノ国」は、「丹波ノ国」の単純な誤りであろうが、観音を仏師に作らせたのが、同国の「女」である点、まづ注目される。「女」とだけあつて固有名詞は示されないけれども、先に見た『丹波国穴太寺観音縁起事』と重ね合せて捉えるならば、この「女」とは宮成の妻ということになるうか。そうだとするならば、右記事中に宮成あるいは彼に相当する人物は登場しないのであつて、『丹波国穴太寺観音縁起事』について檀那と呼ぶべき人物が宮成からその妻へと半ば以上移行していると先に述べたが、この場合はさらに進んで、完全に妻の方に移つてしまつてことになる。そこに、『丹波国穴太寺観音縁起事』から『直談因縁集』へという、無論その間に種々の段階が介在している場合をも含めてのことだが、何らかの流れを想定することも、先述の穴太寺Ⅱ山門西塔院末という事情を背景として見るならば可能であるだろうか。

次に注目されるのは、仏師を襲うのが、全くの第三者の「盗人共」（傍点部）であつて、檀那（ここでは「女」）ではなくなつてゐることである。「本性猛悪」（『扶桑略記』）などと規定され、その通りすかさず凶行に及んでゐた、根っからの悪人と言ふべき当初の檀那が、ここに至つて、犯行に手を染めたりしない全く悪性のない存在と化したのである。先述通り『今昔物語集』以降、その人物像が揺らぎ、少なくとも本来的な悪人というのではない檀那が諸文献に見られたが、それでも仏師を殺害するという凶行に及ぶことに変わりはなかった。『丹波国穴太寺観音縁起事』においても、先述通り檀那と呼ぶべき人物が善人である妻の方に半ば以上移つてゐるようではあるが、一方で、それでもなお檀那としての性格を部分的に保つてゐる宮成が、感世を襲う。それに対して、この『直談因縁集』では、言わば、その人物像の揺らぎが極限にまで達して、仏師の殺害に何ら関わることなく悪性が完全に払拭され、さらに言えば、ひたすら観音造立という作善をな

した、全くの善人へと変貌しているのである。

右のことに伴って、ここまで取り上げてきた縁起伝承の中に見られた、観音の導きによる悪人・檀那の発心という要素が、完全に消失することになっている。右引部冒頭に「付_二賊除_一云_二」と記すように、『直談因縁集』は、普門品に説く（一部先引）ところの、賊難を除いてくれる観音の利益を例証する一つの話として、穴太寺の縁起伝承を採用しているものであつて、そうした意図からするならば、如上の要素はむしろ、余計な邪魔者でしかなかったのでもあろう。また、『丹波国穴太寺観音縁起事』においては、檀那の役割を半ば以上担っていた宮成の妻に悪性は全くなく、それどころか「善女人」と規定されていたが、その妻が右の「女」＝檀那へと繋がっていったのならば、檀那の悪性は自ずと後退することになるとも言えるだろうか。

さらに、身代りになった観音が「アラウヤ」（傍線部）と言う点も、他に見られない内容である。『法華経直談鈔』普門品に記される、「刀尋段々壞」についての彭城の話では、太刀で斬られようとした彭城の身代りになった観音像が、「アライタヤ」（妙法院本）と言った、とする（寛永版本・『観音品直談頭説鈔』「アライタイヤ」。「アラウヤ」と言ったというのは、そうした事例を背景として挿入されたものだろうか。あるいはまた、「此故_二アナウト申也_一」という名称起源譚に結び付いていることとの関係からすれば、「アラウヤ」は「アナウヤ」の、どこかの段階での誤写でもあろうか。

なお、先の『丹波国穴太寺観音縁起事』は「就寺号雖有子細依事繁且略之」（第6行）と注しているが、穴太を「穴憂」と書いた例、または「アナウ」と読んだ例として早いものに、先引『千載和歌集』所載覚忠歌の詞書「穴_二の観音_一」や先出『宝物集』「穴憂の観音」、先出『観音利益集』「アナウノ観音」のほか、『寺門高僧記』卷六収載覚忠「三十三所巡礼記」の「菩提寺。字穴憂寺」、同卷四収載行尊「観音靈所三十三所巡礼記」の「菩提寺……穴宇寺」、『歌枕名寄』（『校本歌枕名寄』）卷三十「穴憂里」、延慶本『平家物語』（勉誠社刊翻刻）第六末34「アナウト云所」（『発心集』（新潮日本古典集成）

卷七12の対応箇所「穴太と云ふ所」、など。また、応永二十七年（一四二〇）九月四日に「参詣穴太寺観音堂」した中原康富が、その六日前「丹州下向」の「路次」にて詠んだ歌に「さのみ我恋しき時は里の名も人の心もあなうなりけり」（『康富記』、増補史料大成）、穴太寺の三十三所順礼歌に「かかる世に生まれあう身の穴憂やと思はで頼め十声一声」。

『一乗拾玉抄』（臨川書店刊影印）普門品に見える穴太寺縁起伝承もまた、非常に特異である。

物語云。丹波国穴太観音、旦那夜誅入有時、彼観音伐。折節仏師居出合、夜誅頭被切也。此頭見観音頭也。

ごく簡略な記述で、状況を十分に把握し難い面があるものの、檀那の家に夜討が入り、ちょうど居合わせた仏師の頭を切ったが、実際は観音が身代りになって切られていて、切り落とされたと思われた仏師の頭は実は、観音の頭だった、という内容のようである。先の『直談因縁集』所載話と同様、檀那と無関係の第三者が仏師を襲っていて、檀那に悪性が全く認められない。そうした檀那像は、『直談因縁集』以前、『丹波国穴太寺観音縁起事』が重修された宝徳二年に近い頃から、起こっていたことになる。如上の点で共通性を有する『直談因縁集』所載話との間には、連絡し合うところがいくらかあるだろうか。ただし、仏師が襲われる場面・状況は、『直談因縁集』にもここまで取り上げた諸伝承にも全く見られなかったものである。なお、切り落とされたはずの仏師の頭を見ると観音のそれであったという内容は、六条河原にて処刑されたはずの「景清が首」を見ると、「千手の御頭」であった（幸若『景清』新日本古典文学大系）という、有名な景清の話を想起させるものである。

五 重層する檀那——近世穴太寺縁起の二重構造

それ以前と同様あるいはそれ以上に十全には把握し切れないけれども、近世、主として右の延宝四年の縁起絵巻以降における状況について、次に少々眺めておくことにしよう。

延宝四年の縁起絵巻の成立以降は、穴太寺にて作成され、あるいは穴太寺の側から発信されたと言ふべき縁起は、管見の限りではいずれも、大なり小なりその縁起絵巻の影響下にあるようである。もつとも、縁起絵巻は先述通り、その元になつた宝徳二年重修の縁起とほとんど全く同文であつて、本文・内容がそれらと一致する場合、そのうちいずれと関係しているのか何とも決し難いのだが、どちらかと言へばやはり、わざわざ新調した絵巻の方に拠っていると見るのが自然かと思われるので、そのように捉えておく。

例えば、縁起絵巻成つて二年後の延宝六年（一六七八）、穴太寺は堺天神で観音の出開帳を行うが、穴太寺文書の中に含まれる、その際の「奉加帳」（『新修亀岡市史』資料編第二巻所載翻刻）に、

丹波国穴太寺順礼観音二十一番目、堺天神におひてかいちやう仕候。抑此観音と申ハ、宇治の宮成と申人有。此宮成悪を好ミ善心のなき事を、妻の女房是をなけき、寛弘七年かのえいぬの年、仏師感世を都より請して金色の聖観音一a体を作らしむ。宮成ひさしの（うが）葦も馬あり。妻の女房、此馬を引出物にして一礼をなし申所ニ、仏師此馬ニのり帰洛す。

然所bに宮成此馬をおしく思ひ、とり返さんがために、大江山ます井の辺に待請、鳥のしたの白羽の矢をさしはけ仏師を終にいころし、我家にかへり馬はむまやにつなき、本尊の御前にまいり見るに、さきにはなつ所の白羽の矢、観音の御むねにたてり。其矢をぬくにあとより血なかる。宮成ふしきに思ひ馬屋を見るに、馬ハなくしてたゝわらくつ一c双のミ有。是よりふしきの思ひをなし、いそき仏師の所に行、「さても道にて何事もなきや」といふ。仏師答て白。「帰路のみちにて既に盗人dにあへり。されはきうせんにかゝる事もなく、財物をうしのふ事もなし。本尊の御かけにより我身あんおんにして帰る」といふ。宮成此事をきゝほつ心をおこし、終に仏道に信しゆせり。然に今此堂たいはにおよひ申ゆへ、造立のためにかいちやう仕候。一紙半銭の御奉加これあるにをみてハ、過去帳ニしるし末代迄朝夕御廻向申へき者也。

延宝六年三月二日

穴太寺／別当

と見える（末尾部に「今此堂たいはにおよひ申」とあるが、穴太寺が延宝四年に火災に遭っていること、先述通り）。波線部「其矢をぬくにあとより血なかる」に対して縁起絵巻の対応箇所「其疵より赤血なかれ、御眼より紅涙をおとし給へり」（59～60行、縁起絵巻の行数でなく、編末資料Aに翻刻のほぼ同文の宝徳二年縁起の行数、以下同）というように、食違いの目に付くところも二、三あるものの、細部に限られており、それら以外は縁起絵巻の内容とほぼ一致していて、それから逸脱する部分はほとんど見られない。そして、実線部a～dは各々、縁起絵巻の16～18行、52～59行、61～64行、73～75行と、同文かそれに近くなっている。全体として、内容も表現も引き継ぐところ大きく、完成したばかりの縁起絵巻に基づいて、その詞をほぼそのままに圧縮したものと言ってよからう。

同様の状況は編末資料C『西国順礼札所二十一番丹波国穴太寺観音畧縁起』（以下『畧縁起』）にも窺え、やはり縁起絵巻に基づいている。同略縁起については、穴太寺に版本一枚¹⁰が伝存、その裏面に「文政六未二月／新調之／八世代／行端」と墨書されているから、文政五年（一八二二）十月に三十三歳で穴太寺住職となった（『穴太寺旧記』収載明治五年「世代調書」覚）中興八世・行端が、住職就任後間もない文政六年二月に製作したものとわかる。文政六年三月三日から三十五日間に亘り居開帳の行われたことが穴太寺文書により知られているのであって（『新修亀岡市史』本文編第二巻752頁）、その居開帳に向けての製作であったに違いない。また、「新調」という言辞からは、そういうものは管見には入らないが、同様の版本が行端の製作以前に存在していたことが窺われる。とすれば、それにも同様に、縁起絵巻に基づく縁起が刻されていた可能性が高いと思われる。さらに、穴太寺所蔵昭和三十四年作成縁起（卷子本墨書一軸、内題「西国第二十一番菩提山穴太寺本尊御縁紀」^{ママ}）も、それに拠ったらしい、現在、穴太寺にて参詣者に配布されているパンフレットに載る文語体の「西国第二十一番丹波国穴太寺本尊国宝観世音略縁起」も、右の『畧縁起』とほぼ同文になっており、結果的に穴太寺

では今も、絵巻に基づいた縁起伝承を広く発信し続けていることになる。ただし、それらの末尾には「別けては女人安産を守らせ玉ふその御誓願なれは」「別しては女人安産の別願なり」と、右『略縁起』を含め近世以前の文献には見出し難く、清水谷善照『観音の札所と伝説』（有光社、昭15）穴太寺条などには「特に当観音は、安産に靈験があるので名高い」と記されたりする、近代になって新たに生じた信仰を反映したかと推測される記事が加えられてもいるが。

右の諸縁起の如くほぼ全面的と言いつ得るほどでなくとも、半ば、あるいは部分的に縁起絵巻に拠っていると見られる穴太寺作成の縁起も、存する。

編末資料B『西国廿一番菩提山穴太寺記』は、奉安諸仏や境内諸堂社に関する諸事項を箇条書きにしたものだが、そのうち「聖観音像」項に、

村上帝御宇、当国曾我部郷今之川上村地云有宇治宮成者、慳貪無慙也。婦者柔和而慈悲心深、請洛之仏工感世、令彫刻大悲像。已而成、其婦大悦、厚償其価。宮成亦引馬与世。世受錢帛帰洛。宮成忽生鄙吝心而言、「我与工価者多。不如殺於路奪之」。則追及大江山増井辺、殺世奪馬而帰。宮成後拝像、肩割切、従其瘡血流、像面流涕。又見彼厩無馬而唯藁沓一双也。大驚使使者馳都見世、世無恙。使者復命、宮成急詣工家備言所以。世曰、「我於大江山逢賊、幸身無恙、逃帰家耳。今聞君言、大悲尊代吾難也」。二人執手感嘆、自此為親友盟。于時応和二年也。則宮成随夢告、建立一字於菩提寺、安置此靈像云。后転号菩提山穴太寺。

と見える。波線部は先掲『元亨釈書』所載縁起記事にほぼ同文が見えており、半ば以上同記事に拠っているものと認められる。しかし一方、実線部は各々、妻が宮成と反対に慈悲深い、感世を襲ったのが大江山の特に増井辺であった、厩に藁沓一双が残されていた、宮成が夢告を得て観音を安置する、などの縁起絵巻に特徴的な内容と、ほぼ対応している。『元亨釈書』だけでなく、それと併せて縁起絵巻にも依拠したものと言つてよからう。さらに、右項目の直前、「本尊薬師仏」項

において、文武御宇慶雲年中古曆大臣の開基・薬師造像を記すのも、縁起絵巻の冒頭に特に見られた内容である。ただし、天下の大疫が薬師造像の機縁となったことや、古曆の殿舎を仏閣にしたことなど、縁起絵巻にもない内容が加わっている。あるいは、「一、同聖観音像」条に引かれる「縁起」の内容も、縁起絵巻末尾部に特徴的に見られたものだが、一方ではやはり若干の相違点を含んでもいる。なお、「本尊薬師仏」条の末尾に「至今寛政辛酉千九百九十七年」とあるので、『西国廿一番菩提山穴太寺記』は、寛政十三年（一八〇一、享和元）のものと知れる。

また、編末資料D『穴太寺記畧』は、元興寺文化財研究所が調査した際のものらしいラベル「E2-1」が表紙に貼付された、穴太寺所蔵の仮綴二丁の一冊で、奥書により、先述の略縁起の版木を新調した中興八世行端が天保八年（一八三七）に記したものと知れる（後掲「*中興八世行端による縁起作成プロジェクト」参照）。本書の場合は、同じ行端により新調された先述編末資料C『西国順礼札所二十一番丹波国穴太寺観音畧縁起』のように基本的に縁起絵巻に基づいているという訳では決していない。また、後半部は、観音造立以降行端に至るまでの簡略な寺歴が中心をなしていて、ほとんど開創と観音造立の経緯のみに関心を寄せている縁起絵巻などと根本的に異なっている。しかし、それでもやはり、「所^{コロ}安^{スル}薬^{ヤク}師^シ仏^{ブツ}正^{マサニ}観^{カン}自^{ミヅカ}在^{アリ}大^{オホ}士^シ也^{ナリ}」^{相伝曰（朱）}。按^{スルニ}往^{ムコト}牒^{ノリ}、慶^{ケイ}雲^{ウン}二^ニ壬^ニ戌^ノ年^ノ大^{オホ}伴^{ハナ}宿^{ヤク}称^{イハレ}古^コ麻^マ呂^ロ公^{キミ}創^{サダテ}立^テ一^{ヒト}字^{ナリ}、号^{ナニ}三^ミ穴^{アナ}穗^ホ寺^テ安^{ヤス}薬^{ヤク}師^シ仏^{ブツ}一^{ヒト}。靈^{レイ}感^{カン}無^{ナシ}比^ヒ。是^{コト}以^テ衆^{シュウ}民^{ミン}皆^ハ尊^{スナハシ}崇^{スガフ}焉^{ナリ}。」と、観音の靈驗縁起譚の前に、慶雲二年古麻呂による創立・薬師安置を記述する点、縁起絵巻系統の所伝を受け継いでいる面が確かに認められよう。

*中興八世行端による縁起作成プロジェクト

右に述べた通り中興八世の行端は、文政五年（一八二二）に略縁起の版木を新調し、さらに十五年後の天保八年（一八三七）に『穴太寺記畧』を記しているが、後者の状況については、いまだし詳細を明らかにすることができず。穴太寺には、先のE2-1『穴太寺記畧』のほか、同じく「穴太寺記畧」または「菩提寺記畧」と題する、一連の縁起の草稿と言わなければならないが、確認して

いる限りでは、四点所蔵されている。E 2-1と同じくいずれにもラベルが貼付されており、それに付された記号・番号の順に、E 2-1を含めてそれらの概略を示せば、

E 1 「菩提寺記畧」(外題) 未装卷子一卷 奥書「天保八丁酉年九月鶴見伴貞毅謹撰」

E 2-1 「穴太寺記畧」(内題) 仮綴二丁 奥書「天保八酉年八月／穴太寺法印釈行端薫浴拝書□○」

E 2-2 「穴太寺記畧」(内題) 仮綴二丁 奥書「穴太寺法印行端薫浴拝書」

E 2-3 無題 仮綴二丁 奥書「鶴見九臯翁伴貞毅薫浴拝撰」

E 30 「穴太寺記畧」(内題) 仮綴二丁 奥書「穴太寺法印○行端薫浴拝書」

奥書によるに、E 2-1・E 2-2・E 30は行端が記しているが、それ以外のE 1とE 2-3の二点は、いかなる人物なのか、鶴見伴貞毅なる者によって書かれている。後者のうちE 1の冒頭に、

菩提山之寺主行端師、与余貞毅善。交驩殆四十年云。一日言余曰。願子為我記畧穴太寺之所由立、使後人易窺尊之靈威。余曰。夫記者吾豈敢。惡能勝其任。応以固辞為分。雖然○師請焉。何可忽遣邪毅。雖不敏請嘗試記之。

それと対応して末尾にも、

……然欲行端師恭仰靈威猶暨於四達無窮之外、因請記畧於余。余○乃畧陳其往事、塞責云爾。

と記述されており、E 2-3にもほぼ同様に見える。これらによつて、E 1とE 2-3は、行端の依頼を受けて、行端と四十年近い交流があつたという鶴見伴貞毅が記したものと判明する。

また、「記畧穴太寺之所由立」した、右の冒頭部と末尾部の中間に位置する本体部分は、先の五点の間でほぼ共通しており、かなりの部分が同文と言ひ得るものになっている。E 1・E 2-3は恐らくは、行端が推敲を重ねつつ書いたE 2-1・E 2-2・E 30のいずれかに主に拠りながら、鶴見伴貞毅が著述したものと推測される。行端による三書には、書込み・訂正など推敲の痕跡が随所に見られ、それらを比較対照するに、E 2-2→E 30→E 2-1と推敲されていたことが窺える。さらに、E 2-1

1の奥書のあとには、「外因乃録穴太寺之所由立之概畧塞責云爾」と、鶴見伴貞毅によるE1あるいはE2-3の右引記事（傍線部あたり）と同様のものが書き込まれてもいる。鶴見伴貞毅は基本的に、行端による最終的な草稿E2-1に依拠していたのであろう。

鶴見伴貞毅によるE1とE2-3もまた、推敲の跡から見て、E2-3→E1という順序で記されたものと思われる。E1・E2-1には各々、右引通り奥書に「天保八丁酉年九月」「天保八酉年八月」と見えるから、E2-2から始まりE30を経てE2-1を行端が記したのが天保八年八月、それを受けて鶴見伴貞毅が、E2-3を経て同年翌九月にE1を記すに至った、ということになる。その最後のE1だけが卷子本に仕立てられようとしたらしいが、表紙も軸も付けられていない未装丁の状態のままになっている。これをもとに装丁も整えたものが作成されたのか、それを果せず、この未装のE1までで頓挫してしまったのかは、わからない。いずれにせよ、中興八世行端を中心として天保八年に、相当の情熱を傾注して穴太寺の縁起を作成しようとするプロジェクトがなされたこと、穴太寺縁起の歴史の中に刻み込んでおかねばならないだろう。

次に、延享元年（一七四四）の穴太寺所蔵『丹波州菩提山穴太寺記』の全文を、先掲『西国三十三所霊場寺院の総合的研究』収載翻刻によって掲げる。なお、同書は、翻刻を載せる上掲書にも言及されないが、叡山文庫双嚴院蔵に所蔵される外題「靈空和尚詩文貼合書」の卷子写本一軸（内1/66）の中に収載されてもおり、上記翻刻と本文が異なる場合にも、その本文を（ ）に入れて傍記した。

丹波州桑田郡有_ニ古梵刹_一。山名_ニ菩提_一。寺号_ニ穴太_一。正殿奉_ニ薬師仏像_一。稽_ニ諸旧志_一、慶雲二年_{（一六五五）}太臣古麻呂公為_ニ之檀度_一所_ニ創建_一也。後寛弘七年庚戌又別奉_ニ普門大士像_一。靈驗殊著。遐邇朝拜者接_レ踵_レ不_レ絶。乃列_ニ為_一関西三十三所観音之一。頃日住持僧行順特登_ニ三台嶠_一。謁_レ余請曰、「我山及寺嘗皆有_レ名、而事_ニ大士_一。僧所居之院未_レ有_レ扁。願_ニ命_一之名。余曰、「大士既深証_ニ三徳妙体_一、即円_ニ現_一三十界応用。機縁当_ニ能感_一大士円心。薦_ニ取自己妙体_一。蓋是吾人之要務也。宜_ニ以_一円心一名_ニ焉_一。行順於_レ是作而曰、「我今得_レ聞_下所_ニ以事_一大士_ニ之要_一矣。復_ニ以_一此訓_ニ後人_一、則其利奚窮_レ可_レ不_レ懋_下」。

也哉」。因併書以遺之。

延享改元甲子冬十月

前大僧正天台山正覺亮潤撰

亮潤の撰したものであり、穴太寺で作成されたものというのではないが、右記述によるに、同寺中興四世の行順が亮潤を訪ねた際に行順に贈られたものであり、その中で穴太寺に「円応院」の号が付されることになる、亮潤と行順との会話内容が後半部を占めているのであつて、穴太寺と密着した、同寺での作成に準ずるものと捉えてよからう。そして、右のうち前半部にのみ縁起らしき記述が見えるが、その中の傍線部が、観音の前に薬師に言及すること、慶雲二年古麻呂創建と伝えることなど、やはり縁起絵巻に特有の内容を備えている。

一方、寺外において勸化本などに記述された穴太寺の縁起伝承は、右のような寺内で作成・発信されたものと違って、縁起絵巻との関係は希薄である。

天保三年（一八三二）版『西国三十三所縁起畧集』（京都大学附属図書館所蔵本）は、

丹波国桑田郡僧家部郷菩提山円応院、俗に穴太寺といふ。本尊は聖観世音ぼさつ也。縁起にいはいはく。当国僧我部郷に宇治宮成といふものあり。邪見無慚にして生死無常のことわりをしらず。その妻なるものは、夫には似もやらで、そのひととなり慈悲忍辱にしてふかく仏法を信心す。頃は応和二年戌のとし、都より仏工観世といふ人をやとひ、此尊像をつくらしむ。後にその像の靈験を感じ出家して、おのが舎宅をすてゝ寺となせり。故に菩提山と称すとなむ。釈書にいはいはく。……靈場記にいはいはく。感世宮成共に出家して大悲の尊像をたふとみけり。宮成は家にかへり、おのが舎宅をすてゝ寺となして、菩提寺と号すといふ。宝物集并縁起雑説によるとなり。いま此寺より出す畧縁起にはすこしくたがふところあれど、あまりにくだしくしければ、はぶきて論ぜず。

と、いくつかの文献（実線部など）に拠った記事を列挙している。そのうち「釈書」「元亨釈書」に拠った記事が最も長く

て中心を成しているが、その前に「縁起」が引かれ、また、『元亨釈書』に拠った記事の中にも「縁起」には、おのが秘したる葦毛の馬を仏師にあたふ、九月廿三日の曉感世帰洛せむとすとみゆ」「縁起」には、さきにあたへしあし毛の馬をうはひかへりぬとみゆ」という割注が加えられている。この「縁起」は、先述の編末資料C『畧縁起』に極めて近いようであるものの、しかし、それについては別に「いま此寺より出す畧縁起」として言及している（波線部）ので、それとは異なるものに拠ったのだろう。今は明確には確定し難い（『靈場記』は厚誉『観音靈場記』）。ただ、いずれにしてもその「縁起」が、官成とその妻を善悪対照的に登場させる点など、縁起絵巻の系統に立つ内容を備えていること、確かである。また、安政四く五年（一八五七く五八）『西国三十三所御詠歌仮名鈔』（和泉影印叢書に翻刻収載）のように、基本的に縁起絵巻に基づき圧縮している編末資料C『畧縁起』に大変近い記事で全面覆われている場合も見られる。しかし、寺外における記述の中には、これらのような事例は、管見の限りごく少数しか見られない。

地元の享保十四年（一七二九）『鹽之魚』下巻（亀岡市立図書館蔵昭和二十四年桂信治郎氏校訂臨写本）が、

元亨釈書に曰く、六十一代村上天皇応和二年、丹波国桑田之民宮成、京洛の仏工感世をして観音一軀を刻むと。俗には眼清が作といへり。謬なり。始は菩提寺且ツ穴穂寺と釈書に見へたり。穴憂又穴雄、今は穴太と書けり。文字是非分り難し。……靈驗世俗の口号にあきらかなり。長きことゆへ爰に略す。

元禄八年（一六九五）版『七観音三十三身靈驗鈔』巻四（京都大学附属図書館蔵所蔵本）が、

本朝工ノ感世ハ、仏像ヲ造テ世ヲ渡ルコトヲ業トス。常ニ法華経ヲ誦ス。又、日日ニ別ニ普門品ヲ誦スルコト三十三遍ナリ。嘗テ波州桑田ノ郡ニ宇治宮成トイフ人アリ。エヲ倩テ観世音菩薩ノ像ヲキザム。乃成就ニ宮成錢帛ヲ以テ償フ。エコレヲ受ヨロコビテ洛城ニ帰ルトキニ、宮成タチマチニ念ズラクハ、「我レ工ニ与タル財一宝大ダ多。彼ヲ殺シテ此ヲ奪取ルトモ他人ハ更ニ知レバカラズ」ト。即チ刃ヲ帶テ追レ之。ツイニ大江山ニシテエヲ殺シテ財ヲウバヒト

リカヘル。宮成後ニ新像ヲ拝スルニ、肩ノ上切割タリ。其瘡ヨリ血流レテ軀地ニ凝リ。宮成アヤシミオソレテ謂ラク、我
レ工ヲ斬ニ観音ナンゾ此ノ瘡アルヤ。即使者ヲ都ニ遣シテ密ニ見セシムルニ、工恙ナシ。宮成聞レ之驚惋シテ、急ギ工ノ
家ニ到テウバイトリタル財ヲカヘシ、備ニ所以ヲカタリテ罪ヲ謝ス。工云ク、「我レ大江山ニシテ賊ニ逢。ソノトキ財ヲウバ、
レテ潜ニ逃テ家ニカヘルノミ。今君ノ言ヲ聞バ、大悲尊吾ニ代テ厄ヲ受玉フナリ」ト。一人手ヲ執テ感嘆ス。其レヨリ
盟ラムスビテ親友トナル。応和二年ノ事ナリ。元亨釈書
二見エタリ

と著録するのは、自ら明かす（各傍線部）通り、主として『元亨釈書』に拠ったものである。宝永三年（一七〇六）版
『観音冥応集』（京都大学附属図書館所蔵本）巻十五16などでも同様。先の編末資料B『西国廿一番菩提山穴太寺記』は、
半ばは『元亨釈書』に、半ばは縁起絵巻に拠っていたし、『西国三十三所縁起畧集』は、『元亨釈書』に拠る記事の前に縁
起絵巻の特徴的な内容を備えた「縁起」を引用していたが、これらの場合には、縁起絵巻の影は全く見られない。さらに、
縁起絵巻以前の寛文三年（一六六三）版『観音感通伝』（龍谷大学図書館所蔵本）の巻下も、目録に「新像肩割」と題して
『元亨釈書』とほぼ完全な同文を載せ、貞享三年（一六八六）版『本朝蒙求』（京都大学文学部図書室所蔵本）巻下18「感
世観音」は、『元亨釈書』とほとんど同文と言つていい記事で大部分を満たしている。

また、縁起絵巻以前のものが万治四年（一六六一）版『観音経和談鈔』（京都大学文学部図書室所蔵本）は、
みやこに眼清と云仏師あり。およそびしゆかつまにもおとらさるほどの上手也。此ぶつしまい曰くはんおんぎやう三
十三ぐはんつゝよみしか、ある時たんばの国に宮成と云人、此ぶつしをよびくたして、くはんおんを一たい三十三日
の間につくり出してたまへといへは、そのことくつくり出しぬ。宮成過分にさくれうひきてものを出しけるか、よく
くおもへは、おくりしひきて物おしくなりて、とりかへさんとおもひ、大江山のふもとにまちうけて、ぶつしのか
へる所をうちころして、ことくくはきとり家にかへりぬ。そのちつたへきけは、このぶつしつゝがなくみやこに

ありて仏をつくると云。みやなりこれを聞、ふしきにおもひ、ぢぶつだうへゆきてみれば、わかつくらせしくはんおんにおほくのきすあり。ことに脇よりうみしるなかれ出ぬ。……先非をくひてほつしんしゆつけして、わかいゑを寺としぼだいじとなつけ、此くはんおんをあんちせり。これをたんばのゆるだのくはんおんと申也。

宝永二年（一七〇五）版『観音靈驗記真鈔』（東海学園女子短大哲誠文庫蔵本国文学研究資料館マイクロフィルム）は、往昔応和二年二京都二眼清ト云ヘル仏師アリ。……其後チ人ノ言ニハ、此仏師恙ナク京都ニ歸リ居テ仏ケヲ作レリト。宮成コレヲ聞テ不思議ニ思、持仏堂ヘユキテ見レバ、我ガ作ラセタル観音ノ像ニ多クノ疵アリテ、殊ニ脇ヨリ膿汁ナガレ出タリ。是ハイカナル事ゾト云フニ、此ノ仏師毎日観音經三十三卷宛誦ム故ナリ。此時宮成忽チ道心ヲ発シ出家シテ、家ヲ捨テ寺ト作テ菩提寺ト号シ、今ノ観音菩薩ヲ安置スルト云云。

天保四年（一八三三）版『観音經和談鈔図会』（稿者架蔵本）は、

むかし都に眼清といふ仏師あり。毘首羯磨にもおとらざる程の上手なり。この仏師毎日観音經を三十三返づゝよみしが、あるとき丹波の国に宮成といふ人、此仏師をよび下して観音を一体、日かず三十三日の間につくりあたへよと乞ふに、其ごとく作りあたへしかば、宮成よろこびて、作料其ほか引手ものをあたへ歸しけるが、宮成か下人、眼清が金銀夥しく持て歸るを見て、ひそかに大江山の麓にて眼清を打ころして、金銀を奪とりたり。……不図宮成が持仏堂を見るに、この頃作りし観世音の御身にあまたの刀疵をうけ居させ玉ひけり。こゝに於て宮成眼清もうたがひとけ、且尊像の新たなるに発心出家して、わが家を寺となし、則ち此尊体を安置したてまつりけり。これを丹波のゆるたの観音と称し、今の穴太寺の本尊これなり。

と記す。前二者はほぼ全体が、最後のは首尾の各実線部あたり特に、寛永版本『法華經直談鈔』に近く、直接か否かはともかく同書に依拠した面があるに違いない。一方、縁起絵巻あるいは宝徳二年縁起に殊更拠ったことを窺わせる記事は、

いずれにも特別見られない。『駒澤短大国文』16に翻刻が収載される貞享四年（一六八七）版松譽『西国洛陽三十三所観音靈驗記』も、同じ著者の右『観音靈驗記真鈔』と、嘉永元年（一八四八）版『西国順礼歌諺註図会』（東京大学附属図書館所蔵本）も右の『観音経和談鈔図会』と、ほぼ同文を載せていて、やはり縁起絵巻の形跡は認められない。享保元年（一七一六）版『三十三所観音道場偈賛』（大谷大学図書館所蔵本）の所伝も、「脇間^{ニテ}有^ニ瘕^ニ瘕^ニ而膿血流^ニ出^ス」などとあって、全般的に『法華経直談鈔』に近似する。

その他、『元亨釈書』と『法華経直談鈔』を合せたような内容の享保十二年（一七二七）版厚譽『観音靈場記』（京都府立総合資料館所蔵天保四年後刷本）や『西国三十三所観音靈場記図会』（京都府立総合資料館所蔵本）巻四などが記載する縁起伝承にも、縁起絵巻系の要素は見難い。

このように、近世穴太寺縁起の状況を窺うに、穴太寺にて作成・発信されたものは大なり小なり延宝四年縁起絵巻の影響下にあるのに対して、一方、穴太寺縁起伝承を寺外で記述したものには、一部を除いて縁起絵巻または宝徳二年縁起に影響された面が見られない。近世穴太寺縁起は、そういう意味での言わば二重構造を示しているのである。

例えば、元禄四年（一六九一）版『本朝俗談正誤』（京都大学文学部図書室所蔵本）巻中37に、「此近年^{ノキンネン}、アル名タカキ寺^ニ恵心^{エシン}ノ直作^{チキサク}ノ仏トテ、公郷^{（マヤ）}ノ筆ヲタノミ縁起^{エシギ}ナドモ殊勝^{シュンヤウ}ラシク作りタルカ……」に始まる一件が著録されているが、「公郷^{（マヤ）}ノ筆ヲタノミ」「殊勝ラシク」作ったような「縁起」は、一つの権威として寺院において重視されたに違いない。「穴太寺住持行広所望」により「二品親王」が「染筆」した狩野永納画の延宝四年縁起絵巻も、穴太寺にとって大きな意味を持つ重宝となったに相違なく、同縁起絵巻成立以降に同寺にて作成・発信された縁起が、右の通り、その縁起絵巻に何らか依拠することになるのは、至極当然のことであろう。

一方、寺外においては多く、『元亨釈書』や『法華経直談鈔』に基づいて縁起絵巻に拠っていないのだが、しかし、

だからといって寺外ではそれが拒否されていたというわけではないようである。近世穴太寺縁起全体の中で見れば少数だが、先述通り、幕末あるいはその近くには、縁起絵巻の系統を引く記述が、『西国三十三所縁起畧集』や『西国三十三所御詠歌仮名鈔』において見られた。さらに、その後も、明治二十六年、勝沼武一編集・発行の『西国観音縁起集』が、『西国三十三所御詠歌仮名鈔』と同様、基本的に縁起絵巻に基づき圧縮している編末資料C『畧縁起』に大変近い記事で全面覆っているのを始めとして、大正四年の『京都府誌』上「穴太寺」条や昭和十五年の先掲清水谷善照『観音の札所と伝説』、昭和六十一年のフジタ編集部編『観音霊場 西国三十三所の昔話』（株式会社フジタ）も、縁起絵巻系統の伝承内容を記述している。幕末頃以降には、寺外においても縁起絵巻系の伝承内容が普及していったようである。

結局、延宝四年に成立した縁起絵巻が穴太寺にとって圧倒的重みを持ちつつも、それが寺外に発信されて定着・普及するまでに一定の時間を要したこと、それが、近世穴太寺縁起の状況に二重構造を齎すことになった、と言ってよからう。そして、それに伴い結果として、延宝四年縁起絵巻と同じく宮成の善良な妻の方が半ば以上檀那の役割を担っている場合と、そうではない、『元亨釈書』や『法華経直談鈔』と同様に、宮成自身が檀那となる場合と、主に両者が重層しているという、檀那をめぐる状況を、近世穴太寺縁起は呈していることになる。

六 長者化する檀那——近世穴太寺縁起と長者伝説・試観音縁起

記述されたのが穴太寺内であれ寺外であれ、縁起絵巻以降の近世穴太寺縁起には、いくつか注目される変容・展開も認められる。前代の檀那像を重層的に継承するだけでなく、近世にはまた新たな檀那像が出現してくる点、特に注目される。近世になると、檀那・宮成を長者とするものが、次の如く少なからず見られるようになるのである。

俗称ニ宮成長者^{ニスヤリト}。其旧宅迹在^ハ于龜山城之南六箇荘河上村^ニ。

『元亨釈書便蒙』卷十七「宇治宮成」注、亀岡市文化資料館第四回企画展図録（昭62）所載瑞巖寺藏版本影印）

村上天皇御宇宮成長者建立

（元文三年奥書『改正西国順礼道中記』（京都大学附属図書館所蔵写本））

応和二（式）年宮成長者建立

（安永二年版『西国略打順礼記』（舞鶴西図書館蔵本国文学研究資料館マイクロフィルム）、寛政三年版『西国順礼

細見記』（国文東方仏教叢書）、文政八年版『西国巡礼細見大全』（稿者架蔵本））

有^テ二字「治宮」成者「居^ス于同^ニ庄^ニ南^ニ條^ニ」人皆称^ス長^ト者。

（編末資料D『穴太寺記畧』E2-1）

宮成長者建立……丹波の穴穂の百姓大富貴者（編末資料E『西国順礼三拾三所普陀洛伝記』実線部は編末所載箇所外）

また、「長者」とは記されないが、

本願^{ほんくわん}宇治^{うぢ}宮成^{みやなり}は丹波の国桑田郡穴太^{あなう}村の大富家^{おほふか}にて、

（『西国三十三所観音霊場記図会』巻四）

も、同様の事例と言えよう。「身不合^{みあは}可^可与^与物無^{物無}」という先引『今昔物語集』の場合とは対照的な檀那像が、近世になって縁起伝承の中にかなり定着していったようである。

そして、右引記事のうち波線部には、宮成の居所が、従来の「丹波国桑田郡宇治宿禰宮成」（先引『扶桑略記』「丹波国

桑田郡曾我部郷に宇治宮成といふものあり」（編末資料A『丹波国穴太寺観音縁起事』）と比べてより詳細に記されている

点、注意される。その他、編末資料B『西国廿一番菩提山穴太寺記』にも「当国曾我部郷^{今之川上村地云}有宇治宮成者」。それら

のうち『西国三十三所観音霊場記図会』や『西国順礼三拾三所普陀洛伝記』が、宮成の居所を穴太村とするのは、穴太寺が同村に所在する点に引き付けられた結果のものかと見られようが、『元亨釈書便蒙』『西国廿一番菩提山穴太寺記』が

「河（川）上村」、「穴太寺記畧」が「南條」とする点、特に気に掛かる。「河（川）上村」は南條・西條・重利から成って

いたようである（『京都府南桑田郡誌』等参照）から、それらは同じ地点を指し示しているらしい。「南條」を含む「河（川）上村」は、穴太村の南方にあつて同村と隣接していた。地名「南條」は今も存し、穴太寺の山門からまっすぐ南に伸びた道を七百mほど進んだあたりを中心とする地域である。『西国廿一番菩提山穴太寺記』や『穴太寺記畧』は、先述通り穴太寺にて作成されたものであつて、それら地理的狀況に通じていたのは当然であるが、さらに、『元亨釈書便蒙』も、正徳五年（一七一五）、現在も亀岡市に所在して穴太寺からさほど離れていない地点にあつた瑞巖寺（註）の中興二世・弦外智逢が著し、同三世・幹山師貞が補修したものであるから、穴太寺周辺の地理・事情に明るかつたに違いない。

宮成の居所についてのこれら記事と対応するように、大正年間の北村龍象『丹波誌』（北村龍象先生喜寿会、大14）は、卷二南桑田郡「穴太寺」条に「寺伝ニ云フ、宇治長者宮成太字南條ニ出ダスハ驕奢非道ナルニ」と記すと共に、同「南條」条には、宮成長者ノ遺迹トテ僅少ナル庭園池泉アリ。夫レサヘ今ハ大正元年其ノ□ノミトナレリ。明治初年ニハ、二間四方ノ石垣ヲ環ラセテ瀦水シ、中央ニ数石ヲ累置シテ嶋嶼ノ形ヲ為セシガ、今ハ夫レサヘ崩壊ニ委セリ。寺村ノ方ニ門裏ト呼ブ地アリテ、長者ノ遺影僅々存在ス。穴太ノ記録ニ由レバ、村上天皇御宇時代ノ人ニシテ、宇治城宮成ト名乗リタリ。此ノ所ハ其ノ本邸アリタル地ト云フ。

と、「南條」に實際あつたという「宮成長者ノ遺迹」について記録している。また、穴太寺の現境内には、「宇治宮成墓」と称する「石造物の屋根」があり、「その寄棟の造りは古風で、鎌倉時代を下らないであろう」とされる（『新修亀岡市史』資料編第四卷62頁）が、それも、もともと七十年程前までには南条村の外れにあつたのを、同じ南条村の後出晴明寺のものに移し（南条屋敷在住澤清氏御教示）、さらに最近になつて穴太寺の境内に移転したもののようである（澤清氏・穴太寺副住職穴穂行仁師御教示）。あるいは、関係するところあるうか、南条内には現在も、「屋敷」という小字名が見られる。宮成の居所についての先引諸文献の所説は、単に文献上のものではなくて、實際地に根付いていたことが窺われる。

さらに、編末資料D『穴太寺記畧』E2-1の末尾部には、

初感^ム世作^ル大^ヲ士之日^{試朱}、作^ル一^ヲ像。試^ム其像^ヲ。今猶安^{ヲシテ}于南^ニ條清^ニ明^ニ寺^ニ。○曰^セ試^ム之大^ト士^ト。

其像相存シテ（朱）

世^ニ俗^ニ是^ラヲ

と見られ、感世が穴太寺の観音像を造立する際、試みに一体作った、その「試^ム之大^ト士^ト」が今も南條の清明寺に安置されている、と記す。実際、現在も曾我部町南條屋敷に浄土宗寺院の清明寺があり、「試観音」を祀る堂が建っている。そして、南條村の庄屋を務めた澤家（曾我部町南條屋敷）には、その試観音の縁起と言うべき側面を備えた文献が伝来していて、甚だ興味深い。未装丁の卷子一軸に墨書されたもので、外題なく、内題「由来書」。奥書など見られず、いつの時点のものか詳細はわからないけれども、末尾に見える二種の黒印と同じものが、澤家に所蔵される多くの近世文書類のうち、安永八年（一七七九）や寛政十一年（一七九九）の文書に各々二種共に、例えば後者の場合、末尾に列挙された署名のうち「南條村売主／常左衛門（澤家祖先）」と「庄屋／定八」の下にそれぞれ、捺されていたりするので、およそその頃のものと推測される（以上、澤常夫氏の御教示あつて確認・推測し得たことである）。その点、墨痕などから受ける印象とも合致する。全文左の通り。なお、△ △内は、割注部分。

抑丹州桑田郡川上村 八幡宮五尺六尺社^社観音^堂□□道成塚□延長（欠損）之頃、曾我部の郷宇治宮門道成と云ふ富家の鋪地、東西三丁南北四丁也。東の方金蔵十ヶ所ならひに金銀取継場所、西の方ハ馬場筋、南の方ハ其家主の鎮守所謂八幡宮なり。外堀垣の内釘貫門弓場、北の方は惣堀なり。宇治宮門道成と申者△延長式申年出生。寛弘三年八十歳を一期して命終△葬る所を伝て、道成塚といふ。嫡子宮成△天禄元年出生△生得悪念強きを、妻□□（欠損）夫の悪心を善心に飄さんと、寛弘の比、都より感世といふ仏工を招き、観音薩埵の尊像を彫刻し、夫にすゝめ共々信心を凝し侍り。此尊像を試の観音として、重て観音一体を刻ませ、堂を建、安置す。今の穴太寺の本尊、西国廿一

番の順礼観音是也。我か像も刻み穴太寺に納め、実に慇懃なれども、宿業の深きか、果報の限りか、家屋敷とも沽却し八今は御領地と成れ共、八幡社・観音堂・道上塚残りて御除地なり。其地面友令繼、馬場筋・外堀・垣ノ内・釘貫・射場に堀池と申伝へも、元を慕て名のみ残り、住馴し所の住居なりかたく、紀州日高郡吉田郷に所縁を求め、終に其かたへ退去し侍り。妻はせんかたなく尼となり、妙知と号し、川上村の清明庵の辺りに忒間四方の堂を建て、彼の試の観音を安置し奉り、昼夜愉悅す。念仏し終りぬ。此清明庵ハ、天元の頃、安倍清明暫く此所に住せ玉ふによつて、忒間四面の庵りを結び、其ゆかりを残せり。正保元申年、宗門ハ浄土、遍照山清明寺と改め、妙知堂試の観音と崇め奉り、則清明寺の支配なりと云々。〇〇「陽刻円形黒印二種」

最初に、宇治宮門道成という富家の広大な敷地について記述しうえて、試みの観音と穴太寺観音の造立を物語る。道成の嫡子宮成の生来の悪心を翻そうと、寛弘（一〇〇四〜一二）の頃に妻が都から仏工を招き、まず「試の観音」、次いで穴太寺観音を造立したという。そのあとは、宮成の没落を記したうえて、その妻そして試みの観音の行末について、妻は尼となり妙知と号し、清明庵の辺に堂を建て観音を安置した、と伝える。最後には、天元（九七八〜九八三）の頃に安倍清明が結んだという、その清明庵の由来と、同庵が正保元年（一六四四）に清明寺となり、右の堂を「妙知堂試の観音」と崇め支配するに至った経緯とを記す。穴太寺観音の前にまず試みの観音が造立され、主に長者宮成の妻の働きによってそれが清明寺に安置されることになったという伝承が、恐らくは十八世紀には行われていたのであつて、『穴太寺記畧』先引末尾部記事は、それを取り入れたものに違いない。

右の『由来書』には冒頭部に欠損が見られる（ 部分）が、僅かに残された墨痕から、その中に「道成塚」が読み取れるように思われる。そうだとすれば、「丹州桑田郡川上村」にあつたらしい三所、「八幡宮」「観音堂」「堂」は上と同様にして読み取れるかと思われるもの。「道成塚」が、冒頭部にまず列挙されていることになり、この『由来書』は基本的

に、それらの由来を説くことを目的としたものであったかと見られる。後の割注部分において、宮成の家屋敷が沽却し、今は「御領地」（恐らくは亀山藩領）となっているが、滅びずに残った右三所は、「御除地」であると注されている（実線部、ただし「道上塚」とあるが）。『由来書』は、そうした特別な意味を持つ三所の由来を、川上村の村方において作成したものである。ただ、その三所の中では、観音堂つまりは試みの観音の由来が中心となっており、さらに、そこに長者（没落）伝説や穴太寺観音縁起、清明寺縁起をも含み込んでいるのである。

長者伝説について言えば、先に触れた通りまずその広大な敷地の様子がかなり詳細に記されているが、その一部は、大正期の先引『丹波誌』に記録された「宮成長者ノ遺迹」の有様と対応しているようである（『由来書』「宇治宮門道成」と『丹波誌』「宇治城宮成」も対応するか）。また、特に目立つのは、先の諸文献には見えなかった、宮成の父である道成が登場していて、割注においてはその生没年も明記されている（宮成については生年のみ）点であろう。しかも、それが葬られた地という「道成塚」がそもそも、右の通り、本書がその由来を説くべき三所の一つであるかと見られる（この「道成塚」が、現在穴太寺境内にある先述の「宇治宮成墓」へと変じたのだろうか）。さらに、没落伝説を伴っており、紀州日高郡吉田郷という退去先も明示されている。先引近世諸文献には宮成長者についてごく簡単にしか記されていないが、本『由来書』によって、長者伝説が地域の中で随分具体的に豊かな内容を持って伝承されていたことが窺われる。

『由来書』の説く試みの観音の縁起が、穴太寺観音の縁起伝承を踏まえたものであること、明らかである。「生得悪念強き」宮成を改心させようと、妻が都の仏師を招き造立したものだとする点、微細な差異も見られるが、『丹波国穴太寺観音縁起事』宝徳二年縁起・延宝四年縁起絵巻の内容と特に共通するであろう。近世において穴太寺にて作成・発信された縁起は、どの程度かはともかく縁起絵巻に基づいたものになっているのに対して、寺外では時代が下る以前にはそうならないと先節に述べたが、この場合は寺外であると言っても穴太寺のすぐ近くにて伝承されたものであって、新たに成つ

た縁起絵巻の内容がそこに取り込まれていたとしても何ら不自然ではないだろう。また、妻が特に大きな役割を演じる縁起絵巻系のあり方を延伸・展開させたように、長者没落後の試みの観音の行末においても妻が重大な働きをしており、尼になって妙知と名乗ったという、ここまで見てきた諸文献いずれにも見えない事項が盛られてもいる。なお、観音だけでなく「我か像も刻み穴太寺に納め」たと記すが、それに相当するものか否か、実際、穴太寺には現在、宮成像と称されるものが本堂に安置されている（副住職穴穂行仁師御教示）。

以上のことから、例えば、穴太寺の縁起伝承から抜け出した宮成が、川上村あるいは南條という近接地域において長者化し、その長者伝説が相当に豊かに醸成されていくと共に、その中から、穴太寺縁起伝承の派生形とも言うべき晴明寺の試観音の縁起が生み出されもし、今度はそれらが穴太寺縁起の中に言わば逆輸入され、本節冒頭に挙げたように穴太寺についての記述の中で宮成を長者とするものがかなり見られたり、先引『穴太寺記畧』のように末尾部に試観音について言及するものが現れたりもした、というように考えることができる。いずれにしても、穴太寺縁起が近世において置かれていた状況の、飽くまで一端に過ぎないけれど、長者伝説や試観音縁起との結合は、同縁起が辿ってきた道を跡付けるうえで一つ注目しておいていい事項であるに違ひなからうし、と同時にそれは、広く寺院縁起と在地伝説との関係や、派生縁起、試みの仏像の伝承の問題などを考えるうえで、興味深い一事例ともなるだろう。

ところで、宮成が富貴な長者ということになれば、穴太寺縁起の中での彼の悪性がより一層高まることになりかねないのではと思われる。例えば編末資料E『西国順礼三拾三所普陀洛伝記』が冒頭に、宮成について「扱宇治の宮成といふ者、丹波の穴穂の百姓大富貴者にて有ながら、至てしくは、人にとては終に物をやりたる事なく、人の物はほしく、幼少より生れ付たるはなはだ吝きものなるに」と紹介するように、富貴であることと慥気であることが対比されて、決して豊かでなく仏師に与えた謝礼がその後の生活をも脅かすほどであるなら、それを奪い返したいと欲するのもある程度理解し得

るけれども、富貴な長者が、彼にとつては何ほどでもないはずの仏師への謝礼を惜しんで奪い返すとは、余りにも欲の皮の突つ張つたとんでもない悪人だ、というような理解がなされてもおかしくないだろうから。右の『西国順礼三拾三所普陀洛伝記』は、「沢山に有金銀なれば御礼として金子三拾両を取出し感世に遣しければ」という説明を加え、そして「強欲非道の宮成」と述べているし、先引『丹波誌』も「驕奢非道ナルニ」と記していた。無論、その悪性が高まれば高まるほど、宮成を改心させた観音の導きの偉大さも高まることになるのであつて、観音の靈驗を鼓吹しようとする穴太寺縁起にとつて、宮成の長者化は決して都合の悪いことではなかつたかとも思われる。

しかしながら、近世の穴太寺縁起伝承においては、宮成を長者化するなどして、その悪性を増す傾向が、特に強くなつていくかという点、必ずしもそうではない。例えば享和三年（一八〇三）版『西国三十三所観音靈場記図会』巻四の場合、本願宇治宮成は丹波の国桑田郡穴太村の大富家にて、常に観世音を信心の人なり。其ころ都に名を得し仏工眼清といへる者あり。是を丹波のくにへよび下し観世音の像をつくらしむ。此仏師眼清は、大悲に誓願をふかくたのみ、常に法華經を讀誦し、其中にも普門品をよむこと、朝暮に三十三べんを怠る事なし。この者、宇治宮成にたのまれ、丹波にくだり大悲の像をつくり、猶々普門品數十べんをとなへつゝ、三十三日にしてことに微妙の御尊像出来させ玉ふ。宮成大によるこび厚く其価をむくふ。眼清もよろこび、これを受けて都にかへる。ときに宮成が下人、眼清が夥しき金銀を持かへるを見て、ひそかに大江山の麓に忍び居て、眼清をうち殺して金をうばひとり行方しれず。宮成これをきゝ大に驚き、早速都へ人をのぼせ眼清のあんひを問ひしむるに、いさゝか途中にてさはりなしとて、我家にて細工なして居たりしが、使の赴をきゝて大におどろき、是も使とともに丹波へいたる。道々もまがふ方なきとりさたなりければ、宮成に面会して身の無事をかたり合ひ、則持仏堂にいたり見るに、此頃わが彫刻したる観世音の御身にあまたの刃きずつきたり。さては此尊像の眼清が身にかはり玉ふなるべしとはじめてさと、靈驗の新たなるに仏果を得

て、宮成みやなりたぐちに発心剃髪はつしんていはつし、我家わがいえを寺てらとなし此靈尊れいそんを安置あんちしたてまつり、菩提寺ぼだいじと号く。今の穴穂寺あなほの本尊ほんぞんこれなり。と穴太寺縁起が記述され、宮成は「大冨家おほふか」とされるが、一方、続いて「常に観世音くわんぜおんを信心しんぐの人なり」と、最初から熱心な観音信者であったという設定になっている。E2-1『穴太寺記畧』（編末資料D）なども、長年観音を敬仰していたとする。しかし、中世以前の穴太寺縁起伝承においては、先に見た通り、感世あるいは宮成の妻が熱心な観音信者であるとの設定はなされていたが、宮成を当初からの熱心な観音信者と明確に位置付けた事例は見出し難い。そして、特に注目されるのは、仏師を襲うのが、宮成ではなくて「宮成が下人みやなりしもへ」であることである。『今昔物語集』所載話のように宮成が依頼して襲わせたというのでもない、専ら下人による単独犯行である。ただ、前々節に見た『一乗拾玉抄』『直談因縁集』が「夜誅」「盗人共」の犯行とするのと違って（夜誅や盗人でなく宮成の下人であれば、仏師が多く金銀を持って帰京することを知っていたからこそその襲撃ということになり、仏師が襲撃されることに一定の必然性が齎あづからされることになる）、宮成は全く無関係というわけではなく下人に対する管理責任が問われるところかもしれないが、その点を除けば「すっかり宮成を善く作り替へたもの」（先掲尾崎久彌『二つの絵巻』）で、長者化しながらも、宮成自身が悪性を帯びることの全然ない筋書になっているのである。近世になって、『一乗拾玉抄』や『直談因縁集』とはまた異なる形で、全く善人である檀那が造型されたことになる。長者化したり観音信者という設定がなされたりはしていないが、宮成ではなくてその下人が仏師を襲うという筋書は、首尾基本的に『法華経直談鈔』に基づくものとして先に挙げた『観音経和談鈔図会』（波線部）やそれとほぼ同文を載せる『西国順礼歌諺註図会』にも見られるところである。

「強欲非道がうよくひどうの宮成」から、右の如く全く悪性を帯びることのない、元からの熱心な観音信者である宮成まで、檀那・宮成の人物像は、近世においても大きく揺らいでいたようである。

その他、穴太寺縁起伝承を載せる近世の文献で、未刊ながら特徴的な内容を備えたものとして、寛延二年（一七四八）

の法談説法のあらましを記したという編末資料E『西国順礼三拾三所普陀洛伝記』⁽¹³⁾と、天保六年（一八三五）写の編末資料F『西国三十三所霊場記』とが、管見にはいった。共に、かなり叙述が詳細になり長編化している。

前者の場合、宮成の妻が縁起絵巻などと同じく登場するものの、それと違って傍観者の脇役と化し、それに対して、宮成の娘が登場、観音造立の契機を齎すなど大変大きな役割を演じている。娘の登場した事例は他に見出し難い。後者の場合、造仏代金をめぐって「タカ／＼五両カ八両ト思シ処ニ、小判卅両ノ刻料ナリ。…」と、実際の具体的な記述がなされていることのほか、感世を襲って帰宅後すぐ、観音の姿を見るまでもなく、宮成が善心を起こして後悔、感世の遺族を思い遣り感世の様子を見に行く、感世が襲われた時に一人の出家が出現して助ける、宮成と感世と両家の家財を打ち込んで本堂を建立、観音を安置する、といった内容・展開を見せていること、特徴的である。

穴太寺縁起伝承の長い歴史の中から浮き出た異色の一齣として、注意しておいてよからう。

*観音の傷

観音の傷について、『今昔物語集』では「其観音御箭跡、于今開テ不塞^ス。人皆参^テ此^レ礼奉^ル」と記されている。例えば、先に触れた、雷によって倒れた柱に身代りになって当たった話、『今昔物語集』巻六14も「皆、其ノ寺ニ参^テ仏ノ御痕ヲ見^テ礼拝^シ恭敬^シ奉^サム」語^リ伝^ヘトヤ」と記すように、傷跡の存在は、身代り・代受苦の証として、そして、広大な利益を齎す霊像であることの証として、永らく喧伝され、人々の注視を受けることになるだろう。編末資料E『西国順礼三拾三所普陀洛伝記』の編末引用部分の少し後に、「穴穂^{あなほ}観世音菩薩の御疵^{きず}年久しく愈^いず、今に於^おて血流^ちれさせ玉ふとて、御開帳^{かいちやう}をいたせば、絹^{きぬ}にて拭^{ぬぐ}ひ取^とりて拝^{わが}ませ玉ふ。今にかゝる事は、先世の証^{しやう}として、邪見^{しやけん}の者にしめし玉はんとの御方便^{ごほうべん}、御済度^{ごさいど}の為也」とある。ずっと後世になっても傷が癒えず今尚血が流れ続けている、開帳の際には絹で拭い取っている、と説かれた事例も見られるのである。

一方、そもそも、右引『今昔物語集』が伝えるような、像にあった実際の傷の存在が、穴太寺縁起伝承誕生の一つの契機となったことも、可能性としては十分考えられよう。例えば、穴太寺と同じ亀岡市内に所在する独鈷投山千手寺には、その本尊観音について

左目に矢を射られる話が伝わっているが、『桑下漫録』所引『独鈷投山千手寺略縁起』、これに関して「実際に現在の千手寺の本尊を拝見すると、左目は瞳がなく白くなっている。これも加須屋委員の教示によれば、玉眼が動いて瞳がずれたか、または玉眼に描かれた瞳が剥落したのではないかという。本尊の左目がこうなったのがいつかはわからないが、この話は本尊の左目の由来を説明した伝説ということもできる」（『新修亀岡市史』本文編第一巻546頁）と説かれている。

傷の場所・種類は、諸伝承により様々。早い段階の『扶桑略記』は胸に矢傷、彰考館本を除く『法華験記』は肩に切傷であった。また、後世のものでも、『観音利益集』は頸に矢傷、『法華経直談鈔』は右脇中心に多くの傷、等。仮に像にあった傷が伝承誕生の契機となったとするならば、その像に残されている実際の傷痕を確認することによって、いずれが当初のものか特定できそうに思われるが、それはなかなか難しい。今に伝わる六太寺の観音像が伝承誕生時そのままであるとしても、そもそも同像は盗難に遭っている現在直接見ることができないし、写真によって判定することは困難である。さらに、盗難前の調査記録も、「左肩の上部には矢鏃のあとが痛ましく残つてゐて、往時の靈験を今に物語つてゐる。扶桑略記、六太寺縁起が共に征矢に当らせられたとするのに対して、それより年代的に古い法華験記が、刀劍の傷を負はれたと記してゐるが、法華験記の説が事実と稍異つた伝を録してゐる証左とも云へやう」（先出『京都府史蹟名勝天然紀念物調査報告』第十七冊、昭12）、「本堂の奥深く納まつている本尊（国宝）の左の胸には、宮成が射たといわれる矢のキズがあざやかに刻み込まれていた」（吉田證編『丹波路—史蹟と伝説—』（日本科学社、昭33）、「実際に観音像をみると胸の一部に凹所があり『扶桑略記』の通りになっているのは興味深い。真偽の程はわからないがおそらく、この観音像を後世、合理的に説明したものと思われる」（『亀岡市史』上巻、昭35）、「右肩に矢疵跡を遺す本像の制作」（先出京都府立丹後郷土資料館特別展図録『観音信仰と社寺参詣』、昭60、盗難後？）と、必ずしも一定していない。ただ、これら実見記録が矢傷という点で概ね一致しているのは、注目される。右引波線部のようなこと——『扶桑略記』や彰考館本『法華験記』に比して、彰考館本以外の『法華験記』の所伝は、観音像の実際の傷の状態と隔たっていて、本来的なものでない——が、言えるだろうか。

七 おわりに——揺らぎ、現代へ

猛悪の檀那から善女人あるいは長者の檀那まで、揺らいで止まない檀那の姿（その時々において随所に、あるいは総体的な傾向としても大まかには、穴太寺観音造立に当った檀那を、より善人化し浄化しようとする動きが見られると言えようか）を一つ中心に追いながら、さらには、それを包含した縁起全体の揺らぎをも視野に入れつつ、概ね時間の流れに沿って穴太寺の縁起伝承を後世に至るまで、あれこれ眺めてきた。

先に触れたように、昭和三十四年作成縁起や現在のパンフレットに載る縁起には、近世以前の穴太寺観音関係文献には見難い、穴太寺観音についての安産の利益が記述されていたし、また、西国札所会『西国三十三所観音巡礼』（朱鷺書房、昭62）に収載される穴太寺住職穴穂行弘師「身代り観音のこと」には、「宇治宮成の妻妙智」「宮成は悪徳官吏で評判の悪人でしたが、妙智は信仰心が篤く」と、宮成の妻に、先引澤家所蔵『由来書』にのみ見えた「妙知」の名が与えられてもいる。後者については、右穴穂師の文章を承けたものか、平幡良雄『西国観音巡礼―千余年の信仰にささえられて―』（満願寺教化部、改訂再版、平16）も「妻・妙智」と記す。縁起の揺らぎは、決して過去のものではない。無論状況は種々違うだろうが、我々もまた、縁起の揺らぎに立ち会っているのである。それは穴太寺縁起に特殊なことではあり得ず、そうしたこと、何であれ寺社縁起を取り扱うに際しては、いくらかでも念頭に置いておきたいと思う。

注

- (1) 足利健亮「老ノ坂と古道」（村井康彦編『京都・大枝の歴史と文化』思文閣出版、平3）や『新修亀岡市史』本文編第一巻（平7）第四章第五節「古山陰道の変遷」。
- (2) 林屋辰三郎・上田正昭編『篠村史』（昭36）「大江山の盗賊」や『亀岡市史』中巻（昭40）第二章第5節「大江山（大枝山）」と

盗賊」、瀧浪貞子「国境の里」（注1村井編著）、永光尚「峠雑考 老の坂峠」（『丹波史談』平成5—特）。

(3) 大曾根章介『日本漢文学論集』第三卷（汲古書院、平11）や千本英史『験記文学の研究』（勉誠出版、平11）参照。

(4) 同題の口頭発表が、仏教文学会支部例会（平成十六年十二月四日、於大東文化大学）にてなされたようであるが（同学会案内）、拝聴し得ていない。

(5) 泣不動の流す涙に、病悩苦痛の涙と哀憐感動の涙と二種あること、拙稿「不動の涙—泣不動説話微考—」（『国語国文』65—4、平8）にて論じた。

(6) この点について、早くには『京都府史蹟名勝天然紀然物調査報告』第十七冊が、「郡司は差しての悪人ではなく、最初は心より造仏を欲したのであるが、禄として仏師に与へた馬が後から恋しくなり、遂に罪を犯すと云ふ風に説かれてゐる」と、ごく簡略に言及している。

(7) 『法華験記』の影響を最も受けたものと考えられると、福井毅「中世靈験説話伝承覚書—靈験のあかしとその話形の混淆—」（『皇学館大学紀要』20、昭57）に指摘されている。

(8) 藤澤隆子「西国三十三所札所の本尊」（後掲『西国三十三所霊場寺院の総合的研究』）は、寺院本尊と札所本尊との異なる例の一つとして、穴太寺の薬師と観音を挙げている。

(9) 『三外往生記』（日本思想大系）30において、「丹波国穴緒寺住僧」が、叡山飯室谷の永覚を迎えに行く観音がしばらく穴太寺に止まった、という夢を見たと伝えるのは、穴太寺が早くから天台と関係を持っていたことを示唆しているだろうか。

(10) 穴太寺に所蔵される『穴太寺における版木・納札の基礎調査』（元興寺文化財研究所、昭62、未公刊）に記録される通り、縦二一・三 横三五・〇 厚一・三。なお、同書が「墨書によると文政8年（一八二五）に八代行瑞により新調されている」と記し、墨書記事中の「六」を「八」、「端」を「瑞」と読むのは、明らかな誤読。

(11) 『元亨釈書』を典拠としていること、本間洋一「『本朝蒙求』の基礎的研究—典拠・先行参考類話資料一覧初稿—」（同志社女子大学『学術研究年報』50—IV、平11）に指摘されている。

(12) 幹山師貞編・宏衛師絃拾遺『瑞巖寺誌』（開山大通和尚五百年大遠諱局、平4）など参照。

(13) 本書の性格について、後小路薫「松誉巖的著述攷—西国洛陽三十三所の観音靈験記を中心に—」（『大谷学報』66—2、昭61）に言及がある。その他、小稿にて取り上げた勸化本についても、同氏の諸論より示唆を受けた面が少なくない。

編末資料A 『丹波国穴太寺観音縁起事』翻刻及び校異

底本Ⅱ穴太寺所蔵宝徳二年重修縁起（改行元のまま、行頭に番号を付す）

対校本Ⅱ四天王寺国際仏教大学恩頼堂文庫所蔵宝徳二年重修縁起写本 ④（底本右に傍記）

金沢市立玉川図書館加越能文庫所蔵『松雲公採集遺編類纂』第十四冊収載写本 ⑤（底本右に傍記）

穴太寺所蔵延宝四年縁起絵巻 ⑥（詞のみ、底本左に傍記）

- 1 丹波国穴太寺観音縁起事^{⑤ナシ}
- 2 夫当寺草創の昔を尋ぬれば、
- 3 文武天皇の御宇、慶雲年中に
- 4 古暦大臣はしめて建立し給へり。^{④お}
- 5 本尊には薬師如来を安置せしむ。
- 6 穴太寺と号す。^⑤ （就寺号雖有子細、依事繁且略之） 其後 ※6の傍線部
④「且略之」のみ本行に記す。
- 7 三百六十余歳を経て、一條院御宇に^⑤ （全体を割注でなく本行に記す。）
- 8 丹波国桑田郡曾我部郷に宇治宮成
- 9 といふものあり。善苗耳に逆り、悪業
- 10 心に逞して、凡名聞利養のいと
- 11 なみの外はさらに生死無常の
- 12 ことはりをしらす。然といへとも、其
- 13 婦はひきかへ善女人の体をそなへ
- 14 ^{⑤ふか}て、深く因果を信じ慈悲を先として、
- 15 頗勝鬘浄徳二夫の跡をまなへり。爰
- 16 寛弘七年かのえいぬのとし、仏師
- 17 感世を都より請して、金色の聖観
- 18 音の像一体をきさましむ。此婦造
- 19 立の間は、毎月一七日を点して持斎
- 20 清浄にして、殊に信心をこらし、毎日^{④⑤花}
- 21 法華經一部并普門品三十三卷を讀^{④⑤ナシ}
- 22 誦し奉る。彫刻功既に訖て、種々の^{⑤録}
- 23 祿物を彼仏師に施与して、隨喜^{⑤みる}
- 24 感歎極なし。爰宮成是を^{⑤みる}見といへ
- 25 とも、一念慚愧の心なくして、剩不受の
- 26 おもひ顔色にあらはれたり。或時

45 むなしくせは、(四)永なく三途の苦にしつ
 46 みて、遙に九品の望をたゝむ事か
 47 なしからさるに(絵)非あらずや」と、かつはうらみかつ
 48 はいさめ侍ければ、宮成婦人の言に
 49 恥て、本意とおもはねとも、(四)お(金)ナシをのれか
 50 秘藏しける茸毛の馬を仏師にあたへ
 51 けり。九月廿三日の曉に、(四)金既に仏師既帰洛
 52 せむとす。(四)金宮成此馬を惜くや思ひけん、(松)む
 53 取返さん事をはかりて、大江山舛井辺
 54 に待うけて、鳥の舌の白羽の矢をさし
 55 はけて仏師を射落して、つゐに彼
 56 馬をととりて帰宅す。則馬をは厩に
 57 つなきて、本尊の御前にまいりて見る
 58 に、さきにはなつ所の白羽の矢、(絵)み金色
 59 の御胸にたちて、其疵より赤血な
 60 かれ、御眼より紅涙をおとし給へり。宮
 61 成不思議の思ひをなして、(四)思をなして(金)ナシ(金)しかつく
 62 懺悔の心をおこす。さてかの厩をみれば、(四)見
(絵)ころろ

63 つなける馬はなくして、たゞわらくつ^{④なし}

64 一双のみあり。忽にさととりぬ、観音、仏師^{④給}

65 の命にかはりて、我矢にあたりたま

66 へりといふ事を。宮成いそき使をのほせ^{④こと}

67 て、感世か家をうかゝはしむるに、其身聊

68 のつゝかもなくして、馬は厩につなか^{④に}

69 れてたてり。宮成弥怖畏の心をなし

70 て、みづから感世か所に行むかひて、「さても^{④道}

71 帰洛の路にして、なにさまの事か有し」と^{④あり}

72 問侍に、感世こたへていはく「大江山にして^{④答}

73 いさゝか盗人にあへり。されとも、弓箭に^{④ナシ}

74 かゝる事もなし、財物をうしなふ事も

75 なし。安穩にして帰洛せり」といへり。誠哉、

76 菩薩悲増の誓願によりて、仏師横死

77 の災難をまぬかれたる事、「於此怨賊

78 当得解脱」の経説にもたかはす。金色

79 のはたへに白羽の矢をうけ給へる

80 事、大悲代衆苦の方便にあらずや。

81 宮成是より前非を悔て、つゐに仏道^{④これ}

82 に進修せり。三十三身十九説法の中に^{④み}

83 「即現婦女身」と見え侍れは、極悪の夫を^{④み}

84 教化せむために、しはらく宮成か妻と^{④あり}

85 あらはれ給ふにもや有けむ。宮成、「我家^{④ん}

86 をこほちて其跡に御堂をつくり、菩

87 提寺となつて、尊像を安置せむ」と^{④くわたつ}

88 おもひ企る処に、観音、宮成か夢に^{④ナシ}

89 告たまへる事は、「我、すてに仏師の^{④給}

90 いのちに代て、汝か手にかゝり疵を^{④ナシ}

91 蒙れり。願は穴太寺の薬師如来に値^{④を}

92 遇し奉りて、衆病悉除の本誓にま

93 かせて、我身の苦悩をやすめん」とのた^{④む}

94 まへり。これによりて、彼堂をかしこに^{④ナシ}

95 つくれり。本寺の号につきて、穴太

96 観音とは申伝へ侍り。其後又二百^{④年}

97 余歳を経て、承久年中に、寺の執行^{④ナシ}

98 なにかしの法眼か夢に告たまはく^{④く}

99 「むかしの箭の痕朽破れて、尊容末

100 代までとまりかたし。早く別には

④造り ④奉る

101 を造とめ奉へし。五濁の衆生を

④造り ④ん ④奉る ④金たま

102 済度せむとおもふ」との給へり。これに

④金たま

103 よりて、あらたに大悲の尊像をう

④たてまつ

104 つし奉り、新菩薩と号して当寺

105 ④おなく ④に同く安置し奉る。かれより靈驗 ④験いよく

106 ④同く ④賤の ④あらたにして、貴賤歩を運ふ事

107 たえず。利生ますく厚くして、現

108 ④ナシ ④事の ④満たますといふ事

109 なし。縁起之趣大概如斯。

④宝徳二年秋八月吉辰 ④ナシ

110 宝徳二年秋八月時正日重修之

④此一卷依六太寺住持行広所望染筆者也 二品（花押）親王

編末資料 B 『西国廿一番菩提山穴太寺記』（京都大学文学部図書室所蔵昭和十年臨写本『穴太寺旧記』収載）

穴太寺 在于桑田郡龜山城之西南十八町穴太村内
境内壹町四面除地也

昔者衆徒五坊、知行四百石、則於其所領之。明智光秀焼滅之云。自中興行広法印、為武州東叡山末寺。尤從往古天台宗也。

今之寺地者、中坊之旧趾也云。

本尊薬師仏

文武帝御宇、古鷹大臣之開基也。慶雲年中天下大疫、彫刻此仏像禱止於疫。則以大臣之殿為仏閣。自爾以来勅願勅封之云。

至今寛政辛酉千百九十七年。

聖観音像 御長三尺也 仏師感世作
在右厨子内

村上帝御宇、当国曾我部郷 今之川上 有宇治宮成者、慳貪無慙也。婦者柔和而慈悲心深、請洛之仏工感世、令彫刻大悲像。已而

成、其婦大悦、厚償其価。宮成亦引馬与世。世受銭帛帰洛。宮成忽生鄙吝心而言、「我與工価者多。不如殺於路奪之」。則追及

大江山増井辺、殺世奪馬而帰。宮成後拝像、肩割切、從其瘡血流、像面流涕。又見彼廐無馬而唯藁沓一双也。大驚使使者馳

都見世、世無恙。使者復命、宮成急詣工家備言所以。世曰、「我於大江山逢賊、幸身無恙、逃帰家耳。今聞君言、大悲尊代吾

難也」。二人執手感嘆、自此為親友盟。于時応和二年也。則宮成随夢告、建立一字於菩提寺、安置此靈像云。后転号菩提山穴

太寺。

華山帝巡国靈場之事、不及記出觀音靈場
歌等往見当寺者則第廿一番也。

一、同聖觀音像御長同先像
在左厨子内定朝法橋作。縁起云。大悲尊告寺僧夢曰、「吾有矢症。刻新像、代而為拜群參。掩閉古像、莫屢開之」。自爾已後、常不開扉、唯待三十三年任圖行開之耳。

一、多宝塔 伝云、飛驒工匠之造、今者改矣。

一、天神社当寺之
鎮守也

一、稻荷明神社

東山院中宮承秋門院御信仰之後、賜丹州之産松月尼者、終納当寺。靈德益新也。

一、阿弥陀仏像

赤梅檀也。模洛東真如堂本尊彫造。門院御内仏也。由来同右。

一、常念仏堂

一、三十三所觀音堂集三十三所觀音靈場
之土埋于堂下

一、千体地藏堂

一、鐘楼

一、仁王門

一、長谷觀音像昔寺西之山有堂安置此像今指其地云
長谷坂伝而云其山赤沢加州旧城趾也

編末資料C 『西国順礼札所二十一番丹波国穴太寺觀音畧縁起』(『畧縁起』、穴太寺所藏版本、判読不能箇所多く振仮名省略)

夫当寺草創、文武天皇慶雲年中に、古曆大臣始て建立し玉へり。其後三百余歳を経て村上帝の御宇に、当国曾我部の郷に宇治宮成と云者あり。邪見無慚にして生死無常の理を知らず。然に、其婦はひきかへ慈悲柔和にして深く仏法を信せり。于時応和二年壬戌の歳、都より感世といへる仏工を請じて、聖觀音の像を刻ましむ。此婦造立の間は、済戒を持ち信心清浄にして、毎日法華經一部普門品三十三卷誦誦不怠。尊像すてに成就しければ、種々の祿物を仏師にあたへて、随喜感歎極なし。宮成是を見る

といへども、一念慚愧の心なし。或時婦人宮成に対して仏道におもむかしめんため、因果の理を示して諫ければ、宮成婦のことはに恥て、本意とは思はねども、己が秘蔵しける葦毛の馬を仏師に与へけり。九月廿三日の曉感世帰洛せんとす。宮成此馬をおしくやおもひけん、取かへさんがため、ひそかに大江山増井の辺りに待受、白羽の矢をさしはけて仏師を射落し、終に彼馬をとりて帰宅し、則馬をは厩につなきて本尊の御前に参りて見るに、先に発ところの白羽の矢、觀世音の御胸に立、金色の御肌より赤血流れ、青蓮の御眼より紅涙を落し給へり。宮成驚て其矢をぬき奉り、大に懺悔の心を發し、彼厩を見るに、馬はなくして唯藁沓一双のみあり、弥奇異の思をなし、扱は本尊仏師の命に代り我矢を受させ玉ふならん、急き仏師の所に行、帰洛の道にして怪しきことはなかりしやと云に、感世答て言く。大江山にして盜賊にあへり。されども弓箭にかゝることもなく、財物を失ふこともなし。觀音の御影にや、安穩にして帰洛せりといへり。宮成是より前非を悔、益渴仰の心を發し、終に仏道に入れり。極惡の夫を教化せんがため、觀音暫宮成が妻とあらはれ給ふにや有けん。宮成御堂を造り尊像を安置せんとおもひ企るころに、觀音宮成が夢に告て、吾像を穴太寺に安置すべし。彼所に住してなかく五濁の衆生を濟度せんと宣へり。宮成御告にまかせて一字の御堂を穴太寺に建立し、本尊を安置し奉る。彼宮成か射奉る処の矢の疵、于現今本尊の左の御胸に残りて顕然たり。大悲代受苦の誓願少もたがはず、感世必死の難を遁れけるこそありがたけれ。それより今に至るまで星霜既に九百有余歳、靈驗日々に新にして、貴賤歩を運ぶ事たえず、利生ますく厚ふして、現當の願ひを満給はずといふことなし。縁起畧してかくのことし。

編末資料D 『穴太寺記畧』E2-1 (穴太寺所藏中興八世行端自筆稿本)

菩提山穴太寺、在于丹波国桑田郡曾我部庄穴太村。棟宇壯觀、所安藥師仏正觀自在大士也。按往牒、慶雲二年戊辰、大伴宿禰古麻呂公創立一字、号穴太穗寺。安藥師仏。靈感無比。是以衆民皆尊崇焉。所以安大士、有字治宮成者、居于同庄南條。人皆称長者。敬大士于茲有年。応和二年乙巳、年招三仏匠感世者、自京、使作正觀自在大士之像。功成、其莊麗端嚴、使人乍生肅敬之心。乃安帳内。宮成大喜、贈所藏之貨財若干、于感世。感世得贈將帰于京。既宮成悔下所其贈之多、而自謂、不如艷彼奪三所贈之貨財。取弓矢私追及于大江山中。即射艷焉、奪得其所贈之貨財。帰開帳、大士則像之肩上有大瘡、見血淋漓之跡。宮成大懼且怪。我射感世艷之。然大士之像今如此独如何乎。乃使下奔家、奴于京、察感世之状。奴到感世之家、

則感世在牀面色自若。奴奔告以感世之無異事、宮成愈怪。自奔于京訪感世、果如奴之言。宮成大慙、嚮所奪之貨財、再贈於感世、且具烈射之斃之奪財之狀、以厚謝罪於感世。感世曰。我先辭君之家、歸路過大江山中、之日有賊、尻我奪所負之貨財。漸遁逃得歸於家。然今聞君之言、則知大士代我受其災。可謂大士之慈誓不虛。相共感歎。宮成歸於家、敬信大士、陪他日。後遂安大士於穴穗寺、與藥師仏併祀。所三世稱三十三所者是皆大士之靈區、穴太寺亦其一也。自爾感驗日新、衆人不遠千里。雜沓駢闐、繼踵不絕。水旱疾疫凡有、求則禱祈。其靈応不尠矣。応永十八辛卯年足利義持公、正長二己酉年義教公、二將軍、賜可專穴太寺執行職及知行等興隆之証書、見附寺供焉。其書今皆秘襲之。及于天正中惟任光秀知于丹波、毀神祠、燒仏宇、奪所其領居多也。穴太寺羅其災殆及廢絶。居無何、寛永中、秋行俊師欲傷勝地之永廢。礪志苦心、續先緒。立堂宇。於是券幹疏於四方、唱感応之偏。民以悦來、工以心競。經始無丞而功就。則安先之二尊、再起穴太寺云。古穴穗寺、後易穴太寺。又号円応院。然年紀世代不可得而知也。自行俊師伝行恵師、行恵師伝行秀師。迄行端累世相伝連綿也。応永正長之間、台嶽西塔院之属。後為日光大王之末、初感世作大士之日、作一像。試其像。今猶安于南條清明寺。曰試之大士。蓋雖二尊之靈地、人能知之、欲行端恭仰靈威猶暨於四達無窮之外。因録穴太寺之所由立之概畧云爾。

天保八酉年八月

穴太寺法印釈行端薫浴拜書□〇

編末資料E 『西国順礼三拾三所普陀洛伝記』(大阪府立中之島図書館所蔵写本)

拟宇治の宮成といふ者、丹波の穴穗の百姓大富貴者にて有ながら、至ては、人にとては終に物をやりたる事なく、人の物はほしく、幼少より生れ付たるはなはだ吝きものなるに、娘老人有。是は親にも似ず、深く情有て、しかも行儀も能して、両親の寵愛斜ならず。然るに十六才の時、仮初の事に煩らひ付て、祈禱医療を尽すといへども、定業にてや、今を限りと成はて、両親に向ひ申けるは、「是迄御苦勞をかけし御恩も送り申さずして、先立参らする事、不孝の罪、殊更女は罪深き身と聞なれば、我菩提の為に、何卒聖觀世音を一体作り玉はるべし」と遺言して、終にはかなく成にけり。両親の歎きいわんかたなく、されども

いつを限りとならざれば、野辺に送りてけむりとなし、残りし物とては戒名斗り也。せめては娘の申残し置し彼観音の像を造立し奉らんとて、京都より仏師感世といふ者を呼寄せ作り奉らんと思ひ、京都へ其趣申登し。仏師感世は常々観世音を信仰の者なれば、大きに悦び有難しと、早速丹波に下り、宇治の宮成が方にて、五十日斗りが間に、聖観音の尊像を刻奉りし所、檀金微妙の尊像出来させ玉ひ、感世は我手で作りながら有難く思ひ拝しける。宮成夫婦も尊像を拝し、涙を流し申けるは、「扱もく不思議やな、此観世音の御顔ばせを拝し奉るに、過し娘の顔に其儘也。勿体なき御事ながら、是程迄に似させ玉ふものかな」とて、声を放て泣き悲み、勿体なき事ながら、「今日は此観世音を過去りし娘と思ひて拝し奉るなり」と悦びければ、感世は「其過さり玉ひし娘子はいか成形にて有しや知らざるに、左ほどに此尊象似させ玉へるとは不思議也」と、供に涙を流しける。宮成はいたつて吝き者なれど、余り嬉しさに、沢山に有金銀なれば御礼として金子三拾両を取出し感世に遣しければ、感世は大に悦び、「是は夥敷下されもの、早速京都へ帰り、家内の者へ見せ悦ばせん。去ながら今宵は是にて明日は早く京都へ帰るべし」と言て泊り居るに、宮成は、情ないかな、例の病の欲心起りて、つらく思ふに、「昼仏師に遣せし金子、余りに過分の事也。扱く口惜き事也。何卒半分取戻したき物」と急に惜くなれば、身内の毛も立ぬる事とや角と惜み思ふに、夜もはや明ける。仏師は宮成夫婦に暇を告て、都へ帰りける。跡にて宮成如何はせんと思ふに、今はたまり兼、跡より追かけ半分は是非取かへさん物と、大江山あたりにて感世に追付しが、ふと又一念の悪心出で、「半分といふも言にくし。幸ひ跡先に人もなければ、打殺して皆取戻し申べし」と、後より静に歩み寄て、只一打に切付れば、態ものにてか、大袈裟に物の見事に切はなし、金子残らず取戻し、仕済したりと大に悦び、我家に帰りける。妻は斯とも知らず、いつもの如く観世音をはいせんと仏前に行、御戸帳を開き見れば、観世音菩薩大袈裟に切れて有。台座迄血流れて有ば、こはいか成事にやと大に驚き、わつと一声伏まろびて歎くにぞ、宮成は何事成ぞと走り寄り見れば、こはいかに、観音の御肩先より乳の下迄大袈裟に切さけし有さま、正しく感世を切伏たる如くの御疵也。宮成もふしん晴ず、段々の訳女房にも語らず、人を以て、京都へ登せて仏師感世の様子を見せけるに、感世は何事もなく、表に仕事し居る。使は挨拶して、「此当り迄用事有て参りしゆへ立寄し」といふにぞ、夫は能社と感世はあひさつして後申けるは、「丹波道は用心甚だわるし。必ず油断有な。我宮成殿より帰る時、大江山のあたりにて後より大成男来て、我に切て掛るゆへ、振帰り見るに、はや拔身ひらりと見へしが、切られしやら叩かれしや覺す逃帰りしが、いつの間にかは、宮成殿のより玉はりし

金子は残らずとられたれ共、身に疵つかず帰りしを悦び居る也。必ずく用心してうかく通り玉ふな」といふ。使は忝しと礼をのべ、丹波に帰り此由一々宮成にはなしければ、強欲非道の宮成も余り事に物をも得言ず、恐ろしき共勿体ない共、一念立所に發起して、「あら勿体なや有難や、我感世也と思ひて切伏しは、此観世音にてましませしよな。我身ながらも相籠の尽果たる此身也。今迄邪見に暮せしを、只今誠に思ひ知たり。あら情なの我心かな。此罪何として遁べき」と發心して、先く京都へ登り、感世に託事してさんげすべしとて、早速京都へ出て感世方へいたり、感世を見ると手を合せて、「そなたは正しく観世音菩薩也。あら有難や」と伏拝めば、感世驚き、「是は何事を仰らる」と申に、宮成「訳を言ねば利も聞へず。我生れ付て人に物をやる事を惜む。此度も其元に観世音の尊像を刻もらひ、すぎさりし娘に能似せられしが、余りの嬉しさに金子を握り出し、其元へ進上致したれ共、跡にておしくなり、其元の帰りを追かけて、大江山にて追かけ見れば、幸ひ前後に人もなくよき仕合と思ひ、後より大げさに切伏て金子を残らずとり返し、我内に帰れば、勿体なや、観世音大げさに疵を請させ玉ひ、台座迄血流れて有。我夫にても猶疑ひの心差はさみ、是迄人を登せ其元様子を見るに、其使の者帰りて其元のはなしを聞。是迄作りし悪業故、我ながら我身にあいそが尽、いか成因果ものにて□る事をなしけるそ。勿体なや。其元は則観世音也。其時金子を入られし財布は爰に有」と、斯の通りに悔懺して、金子残らず財布に入、感世か前に差置。「此事をさんげせん為、登り来りしや。只何事も許玉へ、感世殿」と、伏まろひ手を合せなげき詫ければ、感世大に驚き「扱は其時の盜賊は宮成どのにて有しよな。我常々観世音を信じ奉るに、其節の夜道の恐ろしさ、一夜を貴殿の内にて明し昼出立し所に、観世音の御助に逢奉り、我身に替らせ玉ひ疵を請させ玉ひし事の勿体なや、有難や」と、諸共に有難涙に呉にける。「斯のごとくさんげ有上は、宮成殿の罪もきへぬべし」といふに、宮成は其場より直に髪を切はらひ、斯發心致とて、感世に懇に暇を乞ひて、夫より丹波に帰り、女房に一生に余る程の金銀をあたへ相對にて離別し、扱残る田地諸道具家屋敷迄売払ひ、富家の事なれば、金銀は元より有合す上に、此売払ひたる代金を以て観世音の堂を建立し、娘の菩提我菩提、且は是迄作りし罪科の菩提の為といふにぞ、寺号を菩提寺と付、則ち我家の跡に建立し、本堂御本尊は聖観世音、西国第廿一番丹波の国桑田郡穴穂の観世音是也。此観世音大袈裟に切られ玉ふ疵有が妙也。村上天皇の御宇応和三年の建立也。

編末資料F 『西国三十三所靈場記』(天保六年写本、東海学園女子短大哲誠文庫蔵本国文学研究資料館マイクロフィルム)

扱当札処ノ観音之由来ヲ申サバ、洛陽ノ仏師感世カ身替リニ御立遊バサレタル尊像ニテ、頃ハ応和二年ニ、京ニ感世ト云テ、代々仏師ヲ家業ト致テ、至極身上モヨシ、眷属^眷数多タ召シ仕ハレケルガ、然ニ、此ノ仏師ハ、如何ナル宿縁ニヤ、常々観音菩薩ヲ深ク信向^{マツ}シテ、毎日ノ観音經ノ普門品ヲ誦誦スルコト、日ニ廿三卷ゾ、ヲヨミ、懈怠無ク相勤メテ有ルガ、或トキ、丹波ノ桑田郡ノ穴穂村ニ宇治ノ宮成ト云フ郷士、宿願ノ子細有テ、聖観音ヲ一体建立致シ度ヒト思ヒ付キ、数多ノ仏師ヲ吟味致サレシ処ニ、都ノ仏師感世コソハ當時仏工ニ妙ヲ得タル名人ト伝ヘ聞タ。夫レヨリ遙ノト京ノ感世ヲ呼ビ寄セ、心願ノ通り聖観音ノ御像ヲ刻マセタル処ガ、サシモ名ヲ得タ仏師ナレバ、程無ク、御長ケ三尺ノ聖観音ノ尊像ヲ、相好円満ニ出来シ玉ヘリ。故ニ宮成ガ喜ビ無^レ限リ。然ルニ、尊像ハ結構ニ出来シ玉ヒタレドモ、如何ニシテモ値段ガ甚ダ以テ高値ナ、タカノ五兩カ八兩ト思シ処ニ、小判卅兩ノ刻料ナリ。然ニ一步モマケズニ取テ帰リシ故、宮成ハ仏ヲ作テ過分ノ借金カ出来タ程ノコト故ヘ、宮成ハ大ニ立腹ヲシテ、「己ノレ感世目、僅カノ仏像ニテ多クノ金子ヲ儲ケ取り帰ルコト、不届ケ千万ノ仏師、其ノ分ニテ帰スヘキカ。イザ彼ノ金子ヲ取り帰サン物ヲ」ト、宮成ハ一念貪欲ノ心起リ、瞋恚ノ焰ヲ留メ難タク、「何ンデモ悪クキ感世ジヤ。殺シテナリトモ腹ヲ愈サン」ト、大キナルダンビラト腰シボツコミ、手ニハ弓矢ヲ携ヘ、一散ニ追ヒカケケル。斯ルコトトハ夢ニモ知ラズ、感世ハ静ノト帰ル道、老ノ坂ト云処迄来タリシ処ニ、宮成ハ勢ヲモンデ追掛ケ来リ、向ヲ見レバ、感世只独リトボノト立帰ル。シテヤツタリト、宮成ハ思フ矢盡ヲ目当ニナシ、三人張リニ十三束ノ三ツ股ノ大矢ヲ取テ押シツガイ、キリノト引キシボリ、一イニフハツト切テ放ツ。矢アヤマタズ、感世ガ肩^カ先ニハツシト立ツ。仕スゴシタリト、宮成ハ走り寄り、水モ溜ラヌ水ノ刃バ咽ヘグツト付立テ、クルリノト三度エグリ、手間取テハ一大事ト、首ニカケタル金財布ヲ奪イ取り、尻引ツカラゲ一散ニ跡ヲモミズシテ立帰り、扱宮成ハ内ヘ帰ルト口シク、忽ニ善心發起シテ、熟クノト思フ事ニハ、「ア、思ヘバ、吾レ一旦ノ欲心ニ引カサレテ、罪モ無キ仏師ヲ手ニ掛ケ殺ストハ。テモ恐ロシキ殺生業哉。自ラ仏ヲ作ル程ノ志ガ、還テ仏工ヲ殺ストハ。其ノ罪業ハ幾斗リ。未来ハ定デ無間地獄エ墮罪スルデ有ロフ。地獄ノ沙汰ハ、四方通レハ有ルマイ。ア、夫レニ付テモ、感世ガ宿ノ妻子ハ定ンデ、夫ニ別レ親ヲ殺サレテ、嘸ゾヤ無念ニ思フデアロウ。イザヤ京ヘ尋行テ、彼レ等ニモ此ノ赴ヲ語リ聞カセ、若シ品ニ依テハ妻子ニ敵ヲ快ク打タレヌ物ヲ」ト、覚悟窮メテ宮成ハ、翌日早々ニ出立シテ、遙々ト都ヘ登リ、感世ガ宅ヘ急ギ尋往テ見タ処ガ、コワ如何ニ、昨日フ丹州老ノ坂ニテ一矢ニ射留メ、爾カモ咽ヘ留メ迄指テ殺シタル感世ハ、何時ニ

替ラヌ姿ニテ安全トシテ吾家ノ店ニ居ハリ、仏ヲ刻テ居ルハ、誠ニ不思ギ見ルヨリ、宮成ハビツクリ仰天、「昨日フ吾カ手ニ掛タル感世ガ、今マ此ノ家ニ帰リ居ルトハ。テモ合点ユカズ」ト思ヒ乍ラ心ヲ静メ、是ハ若ヤ人違ヒデハ無キカト余リノ不思ギ故、声ヲ掛ケ、「如何ニ感世トノ、扱テ此間中ハ段々ノ御苦勞、先ヅ〱某モ望ミノ通り観音様モ出来上ラセラレ、千万忝ク存ズル。今日ハ又用向キ有テ、此ノ辺ヘ参リマシタ故ヘ、序デ乍ラ立寄リマシタ」ト申サレケレバ、感世ハ喜ビ、「是ハ〱宮成様、能フ杜ソ御寄リ下サレマシタ。サア〱是ヘ御通り」ト次ノ間ヘ通セバ、暫ク物語リノ上、宮成「イヤ感世殿、卒爾乍ラ、其元此間ダ御帰リノ途中ニテ、何ゾ変タコトハ御ザラナンダカ」ト尋ヌレバ、仏工感世「左レバデ御ザリマス。昨日ハ誠ニ危キ目ニ逢ヒマシタ。某ハ、日モ暮近キ故ヘ、急ギ彼ノ老ノ坂迄デ立帰リシ処、跡ヨリシテ、追ヒハギドモト見ヘテ某ヲ追掛ケ来リ、懷中ノ金子ヲ不_レ殘ラ奪イトリ、其上某ヲ切殺サント致セシ処、忽然ト一人ノ出家ガ顯レ玉ヒ、御衣ノ袂ニテ刃バヲ払ヒ玉ヒ、『如何ニ感世、常〱吾ヲ信ズル故ニ、今亦汝ガ命ヲ助ル程ニ、急ギ早クモ立帰レヨ』ト仰セ下サル、故、某ハ嬉シサノ余リ御指図ニ任セテ、トブガ如クニ逃ゲ帰リマシタ。誠ニ危キ処ヲ彼ノ御出家ニ助ケテ御貰イ申シマシタガ、定デ彼ノ御出家ハ跡ニテ御難ギヲ御受ケ遊バサレタデ有ロフト存ズレバ、夫レガ又悲フ御ザリマス。去ニ依テ、私ハ先ヅ〱命チ拾ヒシテ帰リマシタ」ト物語レバ、宮成ハ一々聞テ胸ニ釘打ツ如ク、「サテハ正ク吾ガ手ニ掛ケテ殺セシト思ノ外、出家ニ命ヲ助ケラレシトハ、定デ仏菩薩ノ御方便ニテ助ケ玉フタデ有ロウ。是ハ何ニ、シテモ未審シ」ト思ヒ乍ラ、ソラサヌ顔ニテ「扱テ〱感世殿、夫レハ危キコト、物語リヲ承ツテ驚キ入リマシタ。併シ其元ハ、常々ノ御信心ニ依テ、危キ場処ヲ逃ゲ延ビ玉フテ、御仕合せ。イザ御帰マ申サフ」ト、宮成ハ何ニモ不_レ語、丹波ヘ杜ソ、帰リケル。扱テ程無ク吾ガ家ヘ立チ帰リ、此度感世ニ刻デ貰フタ御長ケ三尺ノ観音様ヘ御灯明ヲ捧ゲ、若ヤ此ノ御仏ガ出家ト成テ彼レガ身替リニ立玉ヒハセヌカト心ヲ配リ、能ク〱尊像ヲ拝シ上ゲ奉レバ、コワ如何ニ、御長ケ三尺ノ聖観音菩薩、肩タ先キヨリ脇腹掛ケテ真_一文字ニ矢ノ跡有リ、又、御胸ニハ刀ナノ疵ガ有テ、而モ其ノ疵口ヨリ血ノ流ル、コト泉ノ如ニシテ、アケノ血塩ニ染ミ玉ヒテ立セ玉フ。一目見ルヨリ宮成ハ、両眼ニ涙ダハラ〱ト浮ベ、「昨日ノ昼迄デ此ノ尊像何_ト国ニモ御疵ハナカリシニ、今亦此ノ御仏ヲ拝スレバ、数ケ処ノ矢疵刀ナ疵、而モ彼ノ疵口ヨリ血塩ノ流ル、コト、扱ハ昨日感世ヲ追掛ケ殺シタト覺ヘシガ、仏師ガ身ニ別条フ無シ、然レバ彼レガ身替リニ立玉ヒシカ。ハ、ア勿体無ヤ」ト前非ヲ悔デ、又候口急ギ感世ガ家ニ掛ケ付、悉ク懺悔シ物語リシテ、尚ヲモ奪イ取タル金子不_レ殘帰シ、是ゾ吾ガ身ノ菩提ノ種

ト、縁リノ黒髪フツト切り、感世ガ前ニテ即座ニ出家トナラレテアレハ、仏工感世モ是ヲ見ルヨリ、「扱ハ其尊像ガ吾ガ身替ニ御立下サレタカ。ハ、ア有難ヤ」ト、感世ハ感涙肝ニ銘ジ、「最フ此上ハ何ヲ以テカ大悲ノ御恩ヲ報ズベシ。イザ左ラバ吾レモトモニ」ト、是モ同ク出家トナリ、宮成二人トモニ睦布キ出家同行トナリ、夫レヨリ両家ノ家財ヲ悉ク打込デ、兩人ノ菩提ノ為ニ四間四面ニ本堂ヲ建立致シテ、彼ノ身替ノ観音ヲ本尊トナシ、安置シ奉レバ、近処近在ヨリ、余リ不思ギナルコト故ニ、参詣ハ山ノ如シ。夫レヨリ已来タ、靈験感応ハ日ニ増シ夜ニ増シ、新タナル尊像ナレバ、西国廿一番ノ札処穴穂山菩提寺ト号シテ、末世ノ今ニ至迄デ諸人帰依信仰致スコトジヤ。

付記 小稿を成すにあたり、穴太寺副御住職穴穂行仁師を始めとして、清明寺御住職真田康道師や澤清氏・澤常夫氏、また、兵庫県

立歴史博物館学芸員五十嵐公一氏、そして貴重史料御所蔵の各図書館の方々など、多方面から多大なる御高配を頂戴いたしました。記して深謝申し上げます。また、小稿は、京都女子大学宗教部発行『芥陀利華』第263号(平15)収載拙文「大悲慘穴痔縁起」を契機とし、平成十六年度京都女子大学三回生演習「洛中洛外寺院縁起巡考」の前期における検討を出発点としたものです。上記拙文執筆についてお世話頂いた宗教部の皆様、共に検討してくれた三回生演習受講学生諸姉に対しましても、厚く感謝申し上げます。

なお、編末資料を含め、引用の際には、個別に注記した場合以外でも、基本的に通行字体に改め、また、私に句読点や引用記号を施したり振仮名などを省略したりしている。誤読等少なくないことであろう、今後の補訂を期したい。

(本学教授)